

柏原市所在遺跡発掘調査概報

玉手山・田辺・山ノ井・平野遺跡

1983. 3

柏原市教育委員会

は し が き

技術の革新は、私達人類に多くの生活の向上を与えてきました。その進展はめざましいものがあります。生活の中の一つの道具、一つの品物の中にこの技術の凝集された成果が入っています。今、私達は、この高度に成長した技術の枝分かれした各末端の一分野の中で各人の役割を果たして生きているのです。目には見えないけれどなくてはならないものである筈です。

近代化や文明の高度化による機械化が進む中で、人類の平和や幸福を追求していかなければならない時代を迎えて、将来の発展を導くためあるいは時代の変遷に則応するためには、技術の源流、物の歴史を巡る必要があるのではないのでしょうか。文化財は、こうした技術の基礎であり、脈々と躍動する過程の一コマで、歴史の裏付けであると考えられます。

本書刊行に際し、土地所有者や関係各位から御理解と御厚意を賜り改めて謝意を表わします。

昭和58年3月31日

柏原市教育委員会

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和57年度の柏原市所在遺跡の受託発掘調査事業として計画し、実施した各遺跡の概要報告書である。
2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課北野 重を担当者として実施した。
3. 調査及び本書刊行については、柏原市教育委員会社会教育課指導主事竹下 賢をはじめとして、同課花田勝広、安村俊史、そして、広岡 勉、山内 都、大塚淳子、西原清美、松田光代、井宮好彦、上條裕典、石田成年、藤沼敏則、山下祐司、竹下典江、竹下彰子、麻栄三郎、朝田行雄、井上岩次郎、奥野 清、川端長三郎、道箕甚蔵、森口喜信、山田貞一諸氏の協力を得、事務は荻野絹子、松岡由紀子によった。
4. 調査の実施については、辰巳工務店株式会社、八幸住建株式会社、関西電力株式会社、電信電話公社及び三栄建設株式会社の方々に終始懇切な御協力を得た。記して感謝の意を表する。
5. 本書執筆は、主に北野が行ない、遺物については山内があたった。

目 次

第1章 玉手山遺跡

- 第1節 概 要
- 第2節 遺 構
- 第3節 遺 物
- 第4節 ま と め

第2章 田辺遺跡 その1

- 第1節 概 要
- 第2節 遺構と遺物
- 第3節 ま と め

第3章 田辺遺跡 その2

- 第1節 概 要
- 第2節 ま と め

第4章 平野・山ノ井遺跡

- 第1節 概 要
- 第2節 調 査
 - 第1項 第1グリッド
 - 第2項 第2グリッド
 - 第3項 第3グリッド
 - 第4項 第4・5グリッド
- 第3節 ま と め

第1章 玉手山遺跡

第1節 概 要

玉手山遺跡は、柏原市片山町、旭ヶ丘1、2丁目、円明町にかけて広がる広範囲な地域に所在する。当遺跡は、ほぼ南北方向に伸びる標高20～102mを測る割合低い独立丘陵上に在り、旧石器時代の石器を産出し、弥生時代の集落や古墳時代前期の古墳群、また奈良時代から中世に至る集落址が重層的に発見されている複合遺跡である。

近年、この丘陵上には、宅地開発の波が押し寄せ、遺跡の破壊が顕著である。現在ではその未開発の土地を探す事が困難な如く進行した。遅きに失った感が否めないが、今後、出来る限りの保存対策が望まれる地域である。これまでに、丘陵上あるいは西側斜面の開発が多く見られたが、未開発空間の狭少もあって、東側斜面地に拡大されてきた傾向がみられる。

今回の調査は、辰巳工務店の開発申請に基づき、柏原市教育委員会が昭和57年4月20日から5月4日まで実施したものである。その結果、7世紀から8世紀にかけての遺構や遺物を検出し、その成果を報告するものである。

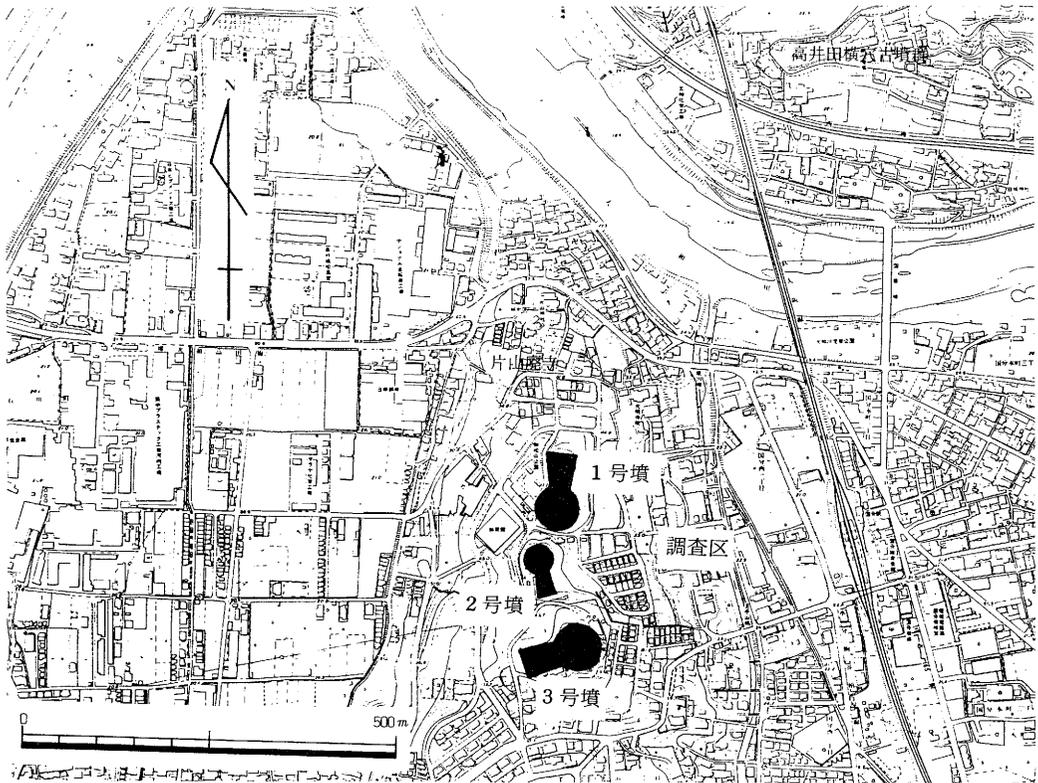


図-1 玉手山遺跡付近地図

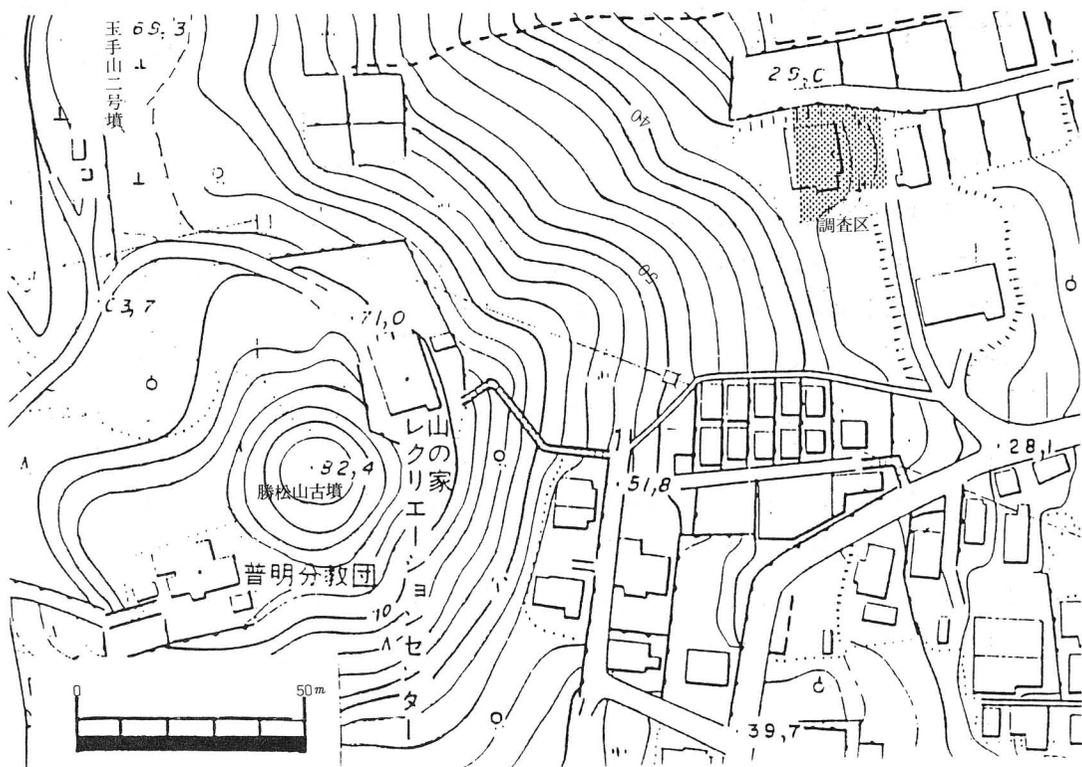


図-2 調査区位置図

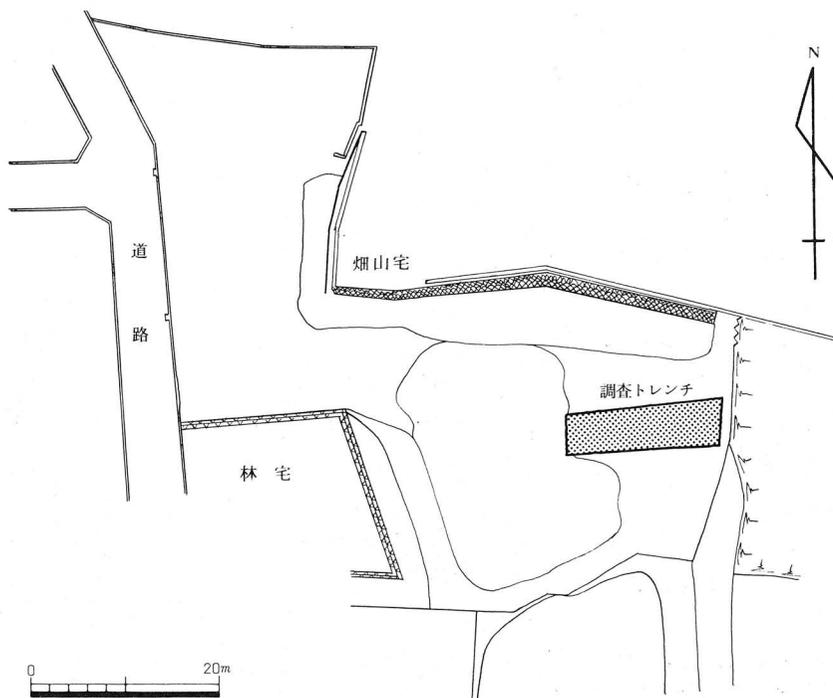


図-3 トレンチ位置図

第2節 遺 構

玉手山丘陵東斜面地の調査である。調査地は、柏原市旭ヶ丘1丁目576-1で、調査対象面積は、898,097 m^2 を測る。東北方向へ伸びる尾根上で、わずかな平坦地を持つ斜面地である。この平坦地は、部分的に遺る土層断面の観察により、20~30 cm の遺物包含層が見られたが、旧家屋の基礎により大部分が破壊されていた。

仕方なく、調査区を斜面地に設定したものである。トレンチの規模は、4.5×17 m である。

遺構は、ピット2コ、溝5本を検出した。

ピットは、トレンチ西側平坦地の縁辺部から、大きさ30×35、40×40 cm を測る方形ピットである。遺存状態は悪く、遺物の出土もなく、時期や性格は不明である。

トレンチ中央部の斜面地は攪乱部分が多いけれど4本の溝を検出した。それぞれほぼ南北方向で北側に傾斜している。

溝1は、幅2.0 m 、深さ0.5 m 。溝2は、幅1.0 m で溝3を切っている。溝3は、幅1.0 m 以上を測る唯一の北から南へ傾く溝である。溝4は、幅1.0 m を測り、溝底部は幅50 cm の平坦面を持つ。それぞれ斜面を削り取ったような溝で出土遺物はなく、時期は不明である。

溝5は、調査区の東端で、斜面の下部にあたる。溝5の東側は平坦面を成す。斜面地を人為的に削り取った後に掘り込まれた溝で、ほぼ南北方向に直線的な平行した2本の小溝からなる。西側の溝は、幅50 cm 、底部幅20 cm 、深さ30 cm を測る断面逆台形状の溝である。一方の溝は、80 cm の間隔を持ち平行して、幅40 cm 、深さ15 cm を測る断面U字形の溝である。また、この溝の下層には、石列として10~20 cm 大の石を並べていた。

出土遺物は、溝5から土師器、須恵器、瓦や砥石が出土した。

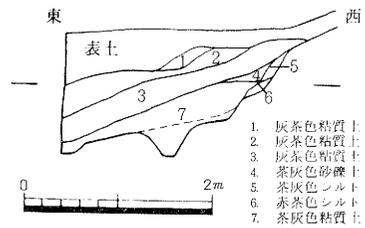


図-4 溝5断面図

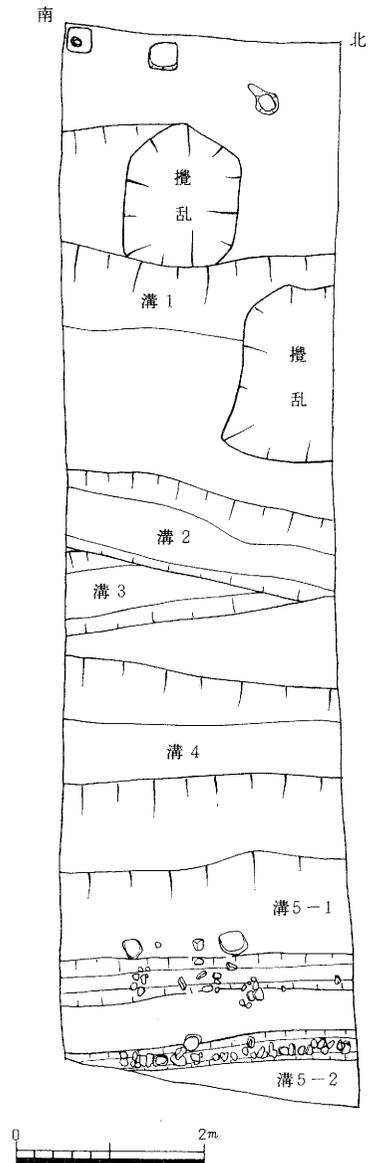


図-5 調査区遺構図

第3節 遺物

溝5からは多量の須恵器および土師器が出土した。ここでは図示したものについて略述する。

須恵器 (第7図 ①~⑭) ①~⑫は須恵器の杯蓋で、いずれも、つまみのつく形態のものである。そのうち①~③は口径10.1~11.5 cmを測る小型のもので天井部は高く、頂部の $\frac{1}{2}$ をヘラ削りする。かえりは小さく、口縁部より外方に突出するものはない。④は口径15.7 cmを測り、全体に扁平なつくりである。口縁端部は丸く仕上げ、痕跡的なかえりを有し、やや扁平な宝珠つまみが付く。⑤~⑫は極めて扁平な宝珠つまみと下方へ短く屈曲する口縁部をもつものである。口径11.7~13.8 cmをはかる。灰白色を呈しやや軟質のものも含まれる。⑬~⑲は杯身である。⑬・⑭は小型で高台が付かない。底部はヘラによる切り離しのあとをとどめ、未調整である。⑬は体部の下半が丸味をもち、口縁部は直立する。⑭は直線的に斜めに広がる体部を有するものである。⑮~⑲はいずれも高台を持つ杯身であるが、口径によって、9.4~10.1 cmの小型のもの、13.1~15.4 cmのやや大型のものに分けられる。小型の中の(⑮~⑰)は斜めに直線的にひらく体部を有し、高台は低いが、やや外方にふんばる形態のものである。大型の杯身には、小型と同様の形態のもの(⑳~㉓)と、底部と体部の境が丸味をもち、口縁がいくぶん外反気味のもの(㉔~㉖)とがある。これは、前者にくらべて高台がわずかに高い。㉗は、広口壺の体部である。低い高台を持つ。

土師器 (第7図 ㉕~㉙) ㉕~㉙はいずれも口径が10.1~17.9 cmを測る皿である。このうち、㉗の内面に正放射状暗文が見られるのみで、のこりのものは磨滅が甚しく調整は不明である。また㉘は口縁端部が内側に屈曲する。㉚は杯の高台の部分である。比較的しっかりしたつくりで、中程で屈曲して外方にひらく形態をもつ。㉛は小型の広口壺である。口径は9.4 cmをはかり、口縁部の内外面をナデで仕上げている。㉜は小型の直口壺となるものであろう。丸味をもった平底で、復径6.8 cmを測る。㉝は口径21.0 cmを測る杯で、口縁上端部を拡張して水平に仕上げ、内面に段を有するものである。口縁部外面は強いナデを施している。㉞は、土鍋である。口径33.8 cmを測る、偏球形の体部から大きく「く」の字型に口縁部が屈曲する。口縁端部は外面が肥

厚し、全体に丸味をもつ。体部内面は6本/cmの荒いハケ目仕上げで、口縁部および、体部外面はナデで仕上げている。

これらの須恵器および土師器はいずれも、7世紀中葉から、8世紀前半に含まれるものである。

砥石 (第6図) 溝5から1点検出された。断面が長方形を呈する角柱の両端が折損したもので、相対する2面を研磨に使用している。石材は不明であるが、乳白色のやや軟質のもので、気泡を含んでいる。

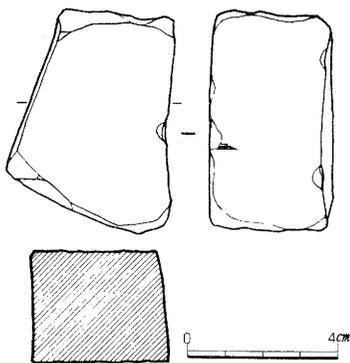


図-6 砥石実測図

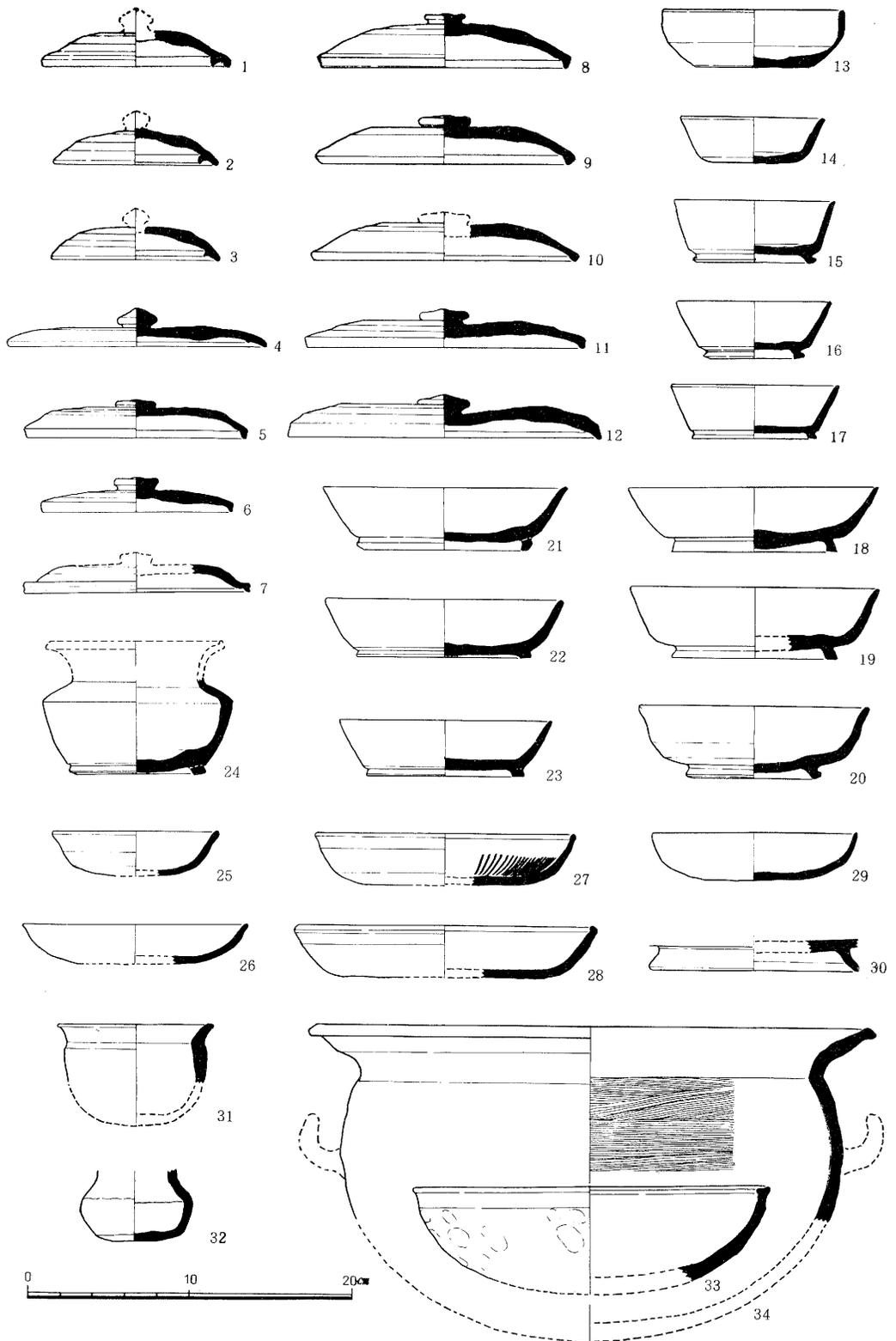


図-7 溝5の出土遺物実測図

第4節 ま と め

玉手山丘陵は、大和川、石川の合流地点をその先端部に持ち、地形的な観点からみても、その立地条件は優れたもので古くから古代人の生活の痕跡が見出される複合遺跡である事が伺われるのである。玉手山遺跡は、現代まで数度の調査が行なわれてきているが、その結果が公的に明らかになっておらず、遺跡の種類や性格あるいはその範囲等についての実態さえも把握されないのが現状である。よって、どの時代の遺構をとっても資料の収集が急務であり、今後の調査事例の増加が待たれる。

今回の調査は、玉手山丘陵東側の斜面地であり、調査例としては最初である。現地踏査において、奈良時代の遺物散布が見られた。その遺物に対応した遺構の検出が期待されたのであるが、大半部分削平された状況にあり、成果の程が危惧された。

遺構は、平坦地の縁辺部においてピット2個と斜面地と斜面下に5本の溝を検出した。斜面地に見られた溝(1~4)については、やや新しい時期の遺構と考えられるが、ピット及び溝5については、奈良時代前後の包含層の下層から検出されており、出土遺物も日常雑器類がほとんどであるところから見れば、集落跡の一端が伺われる。

調査地は標高67mを測る玉手山2号墳の東側下方の標高33~38m斜面中腹部に位置する。この標高は、同丘陵北端部に位置する片山廃寺と同一標高である。片山廃寺の周辺にも同時期の集落跡が確認されているが、今回の調査地までその集落範囲が拡大された事になる。一概に同一集落と短絡するのは危険であるが、丘陵上の集落としては、空間地の狭少さから限定すればその可能性が高い事があげられる。溝5についてその検出状況を見れば、地山カットして溝を掘削している点から、平坦地の少ない丘陵部での土地利用をこのように行なわなければならない事を示している。

溝5上には50cmの遺物包含層が見られた。大別して灰茶色粘質土(3)と茶灰色粘質土(7)である。灰茶色粘質土は、溝西側の斜面地あるいは斜面地上部の平坦地から転落した堆積土である。茶灰色粘質土は、その下層で東側へ水平堆積した状況が見られる。上方の平坦地と同様この溝も集落関係の遺構の一端を成すものである。

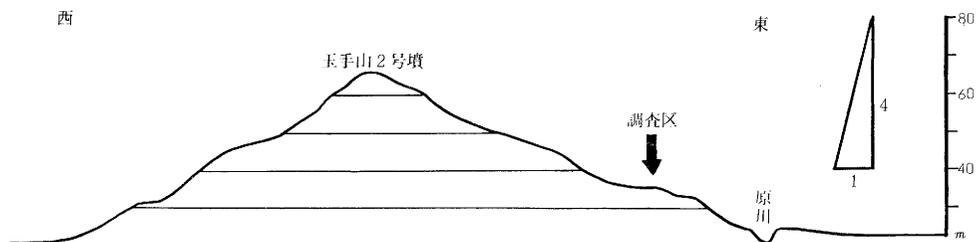


図-8 玉手山丘陵横断面図



調査区全景（東から）



溝 5 上 層 (北から)



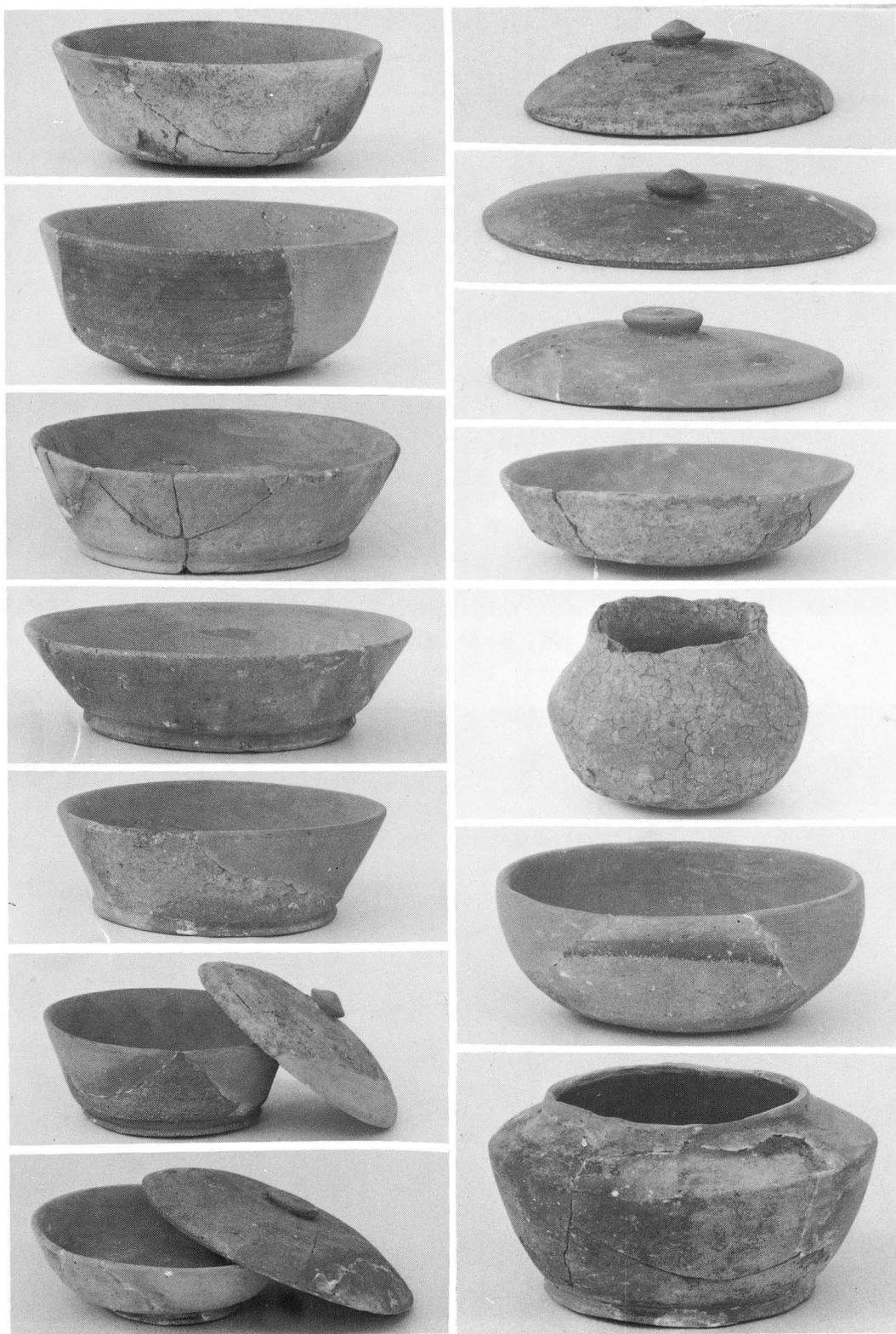
溝 5 全 景 (東から)



溝 5 断 面 （北から）



溝 5 最 下 層 （北から）



溝 5 出 土 土 器

第2章 田辺遺跡 その1

第1節 概 要

柏原市は、商都大阪市より10数kmを隔てる通勤圏として、交通、環境が好条件なところから、住宅地の開発が顕著である。このような状況に対応すべき公共事業の一環として官民共同の国分再開発事業を画し、昭和49年から現在まで8年間の長期に渡り事業を実施し、都市の近代化をめざした。

田辺遺跡は、国分本町4～7丁目、田辺1～2丁目に所在し、国分地区の一面にあたることから、その余波を受け開発が顕著である。この事は、文化財包蔵地の開発も必然的に増加し、以来柏原市教育委員会に、土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書の提出が多くなされ、発掘調査依頼が漸次増している。

当調査は、昭和57年2月3日、前田繁太郎氏からの上記届出書が提出され、柏原市教育委員会が調査依頼のもとに昭和57年4月10日試掘調査を行ない、その結果を踏まえ昭和57年5月6日～5月30日まで発掘調査を実施したものである。



図-9 調査区付近地図



調 查 地 点

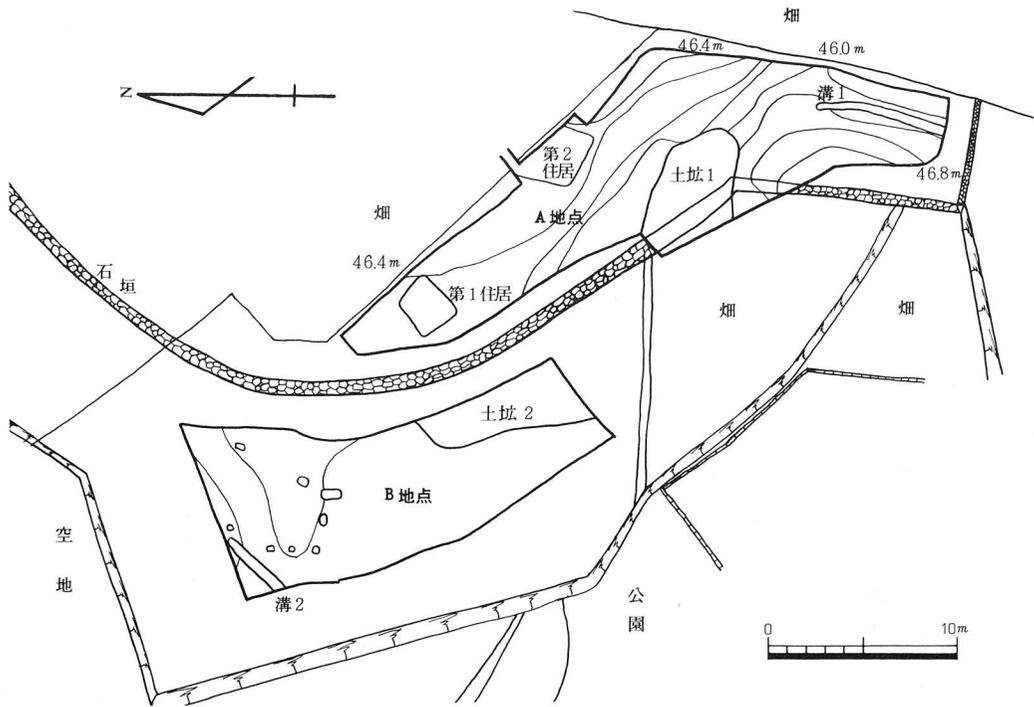


图-10 調 查 区

第2節 遺構と遺物

第1項 第1住居

当調査区の基本層序は、上層から表土及び畑の床土が約30～40cmの厚さで見られ、その下層に黄褐色粘質土の遺物包含層が見られた。遺物包含層は10～20cmの厚さで見られ、谷筋に向かって厚い傾向を示す。遺物包含層の下層は黄褐色粘土である。黄褐色粘土は地山で、かなり粘性の強い粘土である。

第1住居は、遺物包含層除去後に検出された。位置は、A地点の北側端にあたり、なだらかな丘陵尾根上に立地している。大きさは、南北2.1～2.3m、東西2.3～2.7mを測る南側にやや八の字型に拡がる隅丸方形のやや小規模の堅穴住居である。方位は西へ36°傾く。

遺存度が悪く、床面まで10cmの深さしかなかった。出土遺物は、床面から、土師器、須恵器、砥石、鉄製品、鉄滓等の遺物が整理箱1箱分出土した。遺物の出土状況は、住居縁辺部にはなく、中央部に広がっており、土師器、須恵器については住居北半に集中し、南半には少ない。

これらの遺物除去後に、床面全体に炭を多く含む層を確認した。当初、遺物検出時に炭があるのを発見した折火災住居と思われるが、そのような状況は見られなかった。明らかに炭を含む整地層である。

住居南端部でかまどが検出された。残りが悪く構造的なものは不明である。床面からは、3個のピットが検出された。径20cmの円形ピットである。深さはそれぞれ5～10cmと浅く、住居の柱穴としては変形である。通常、住居内側に見られる排水用の溝は検出されなかった。

出土遺物の中に、砥石や鉄滓が見られ、何らかの工房跡ではないかと考えられるが、製品及び未製品の出土がなかった。

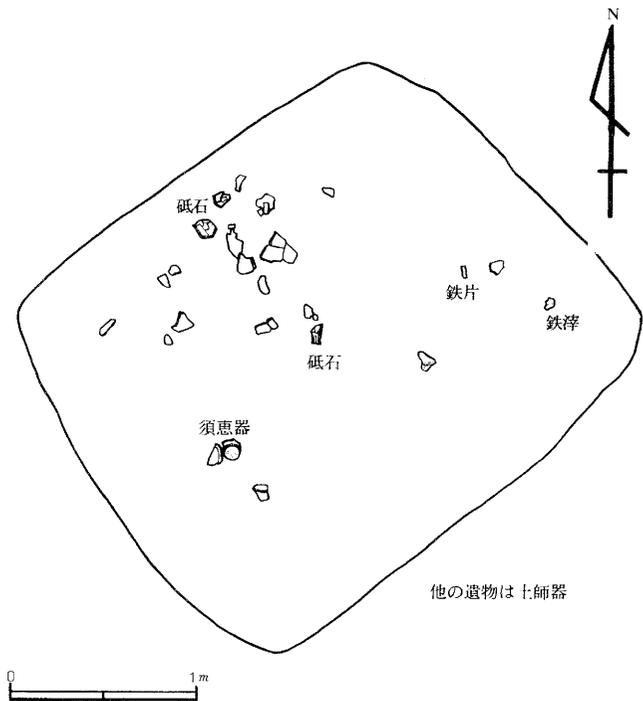


図-11 第1住居床面遺物出土状況

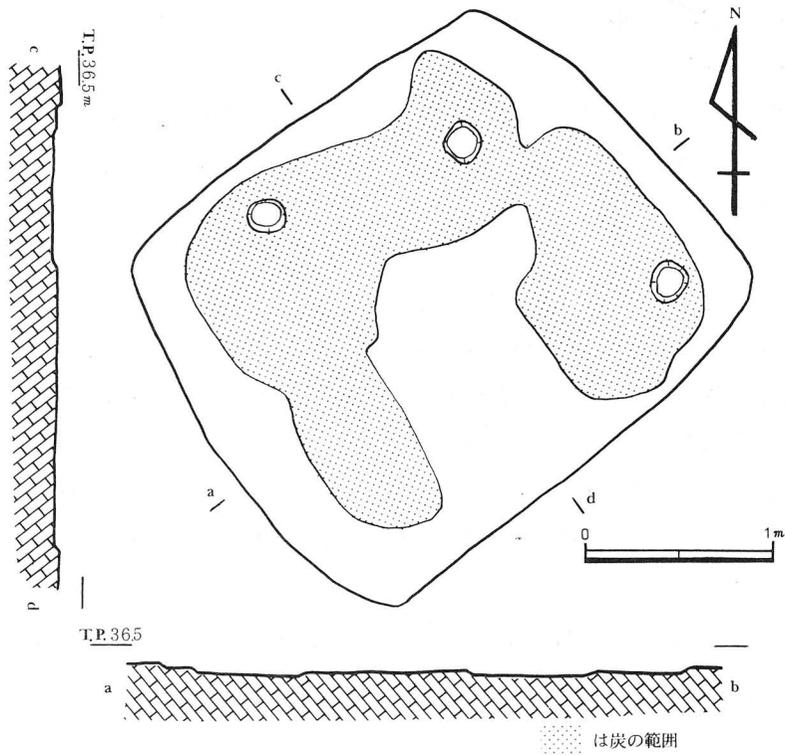


図-12 第1住居下層遺構図

遺物

土器 第1住居の床面付近から、多くの土器が出土したが、図示し得たのは左図(図-13)の如くである。

①は須恵器の杯蓋である。天井部を平らに回転へら削りし、口縁部との間はやや凹みがちである。②は竈の体部である。肩と体部下半に沈線をめぐらせ、体部中程にへら描き文を施す。③はすり鉢の底部である。④は土師器の高杯の杯部である。体部外面下半に段を持つ。内外面ともに磨滅が甚しい。⑤は土師器の甕である。くの字に屈曲した口頸部は口縁部で外反する。磨滅のため調整は不明である。

⑥は、土師器の杯である。口径12.0cm

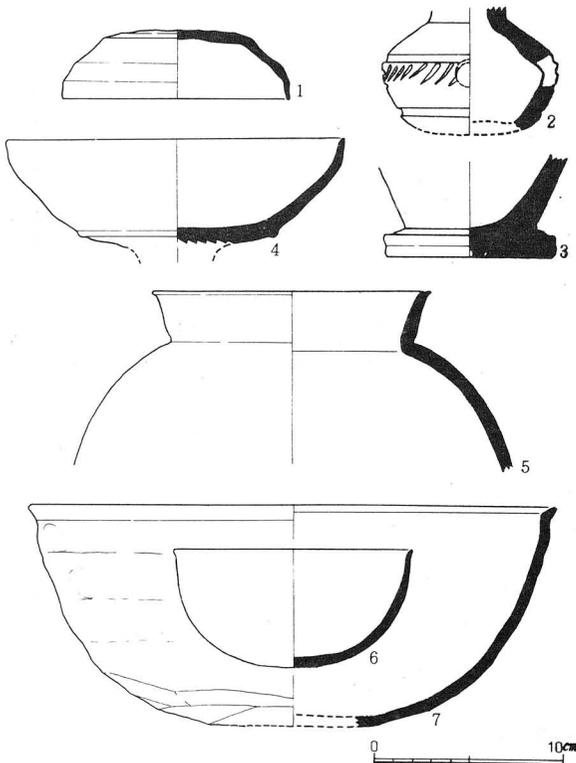


図-13 第1住居出土の土器実測図

器高6.1 cmの深い器形で、口縁部は外反する。内外面とも調整は不明である。⑦は土師器の大形の鉢である。口縁部が屈曲して斜め上方にひらく。体部下半をへら削りするが他の調整は不明である。

砥石 3点を数える。①は、断面方形および六角形を呈する棒状の両端を折損したもので、灰白色を呈している。周囲の3面は研磨面として使用され、残りの一面も工具で削って平坦に仕上げられている。②は一端を欠失後も使用されたらしく、折損部に向かって傾斜する研磨面を持つ。またいずれも研磨によって凹んだ溝を有する。②にはとくに深い溝が3条穿たれており、溝の断面は、U字型および逆台型を呈している。奥田 尚氏の鑑定によるとこれらはいずれもざくろ石流紋岩で柏原市近隣では二上山雌缶付近と奈良県桜井市付近に産する。なお、この第1住居からは、砥石の他に、方形に整形をした石材(20×20×30 cm)も数点出土している。

鉄滓 鉄滓は、5×5 cmの不整形を呈し、厚さ約1 cm。全体に凸レンズ状を呈している。凸面は比較的滑らかだが凹面は凹凸が激しい。断面にも多くの気泡を含んでいる。

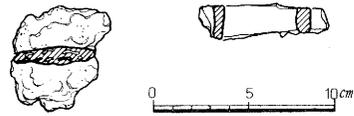


図-14 第1住居出土の鉄滓・鉄片実測図

鉄片 鉄片は、幅1.0~1.5 cm、長さ6.5 cm、厚みは0.8 cmを測る棒状のものである。一方をやや薄く幅広くつくり、その先端は欠失している。刀子状であるが、やや厚手であることから茎の部分か、あるいは未製品の可能性がある。

図版 №	長さ	横幅	厚さ	重さ	面	U字状溝	色調	材質
図-15-1	8.6	10.4	8.8	1055.0	6	1+2	淡茶灰色	柘榴石流紋岩
図-15-2	10.7	3.8	3.4	199.0	4	1+2	〃	〃
図-15-3	7.6	6.6	6.6	320.0	3	1+2	〃	〃

表-1 砥石 (単位は cgs)

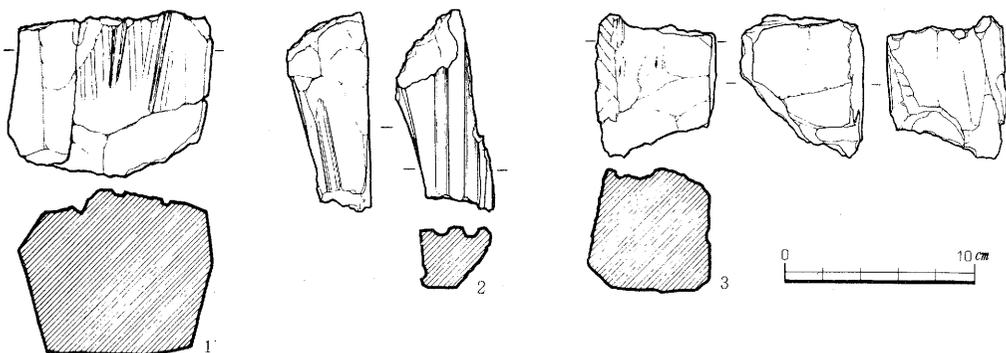


図-15 第1住居出土の砥石実測図

第2項 第2住居

第2住居は、A地点中央部東端に位置し、第1住居より南東へ7mの距離を隔てている。調査範囲内では西半を検出しただけである。隣接地に協力を願い出て東西長の確認だけ行なった。その結果、南北3.3、東西3.2mを測る隅丸方形の堅穴住居である。方位は、東へ21度傾く。第1住居とは30数度の傾きの違いが見られる。

出土遺物は、土師器、須恵器が少量出土しただけである。基本層位は第1住居と大差ない。床面より3個のピットを検出した。径20cm、深さは10cm以下でありあまり深くなく、住居内の通常柱穴のある位置になく変形である。住居内縁には、幅20～30cmの排水溝が検出された。住居南側部分だけしか検出されなかった。

住居下層から2本の平行した溝を検出した。住居との方位は30～40度を測り、ほぼ住居一辺と同じ長さである。深さは10～15cmを測り、掘方断面は深いU字型である。住居との関わりについてはあまりよくわからない。

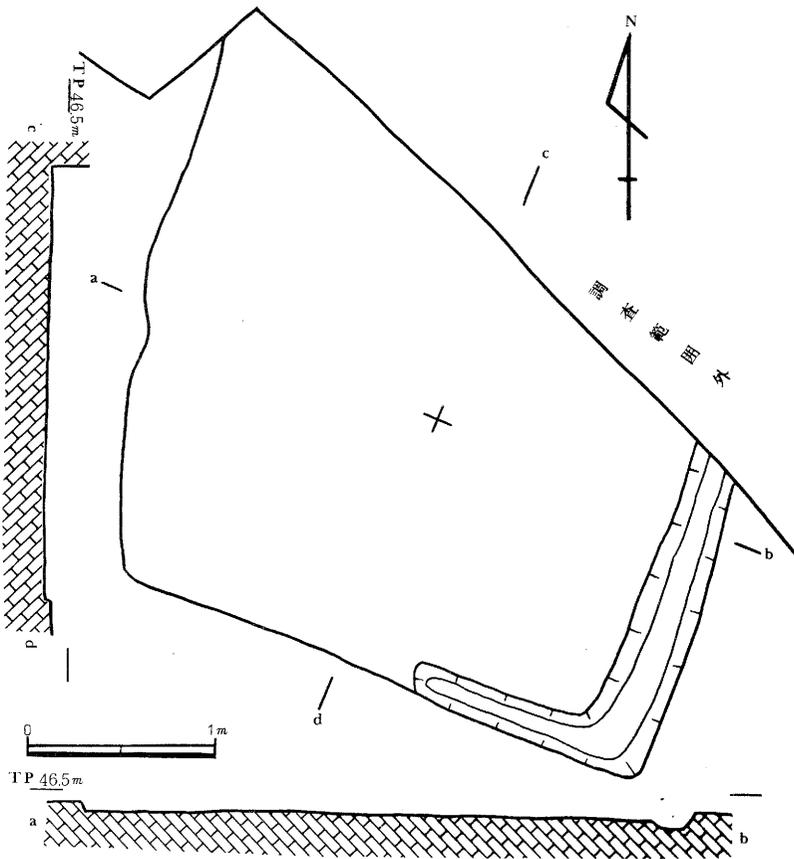


図-16 第2住居上層遺構図

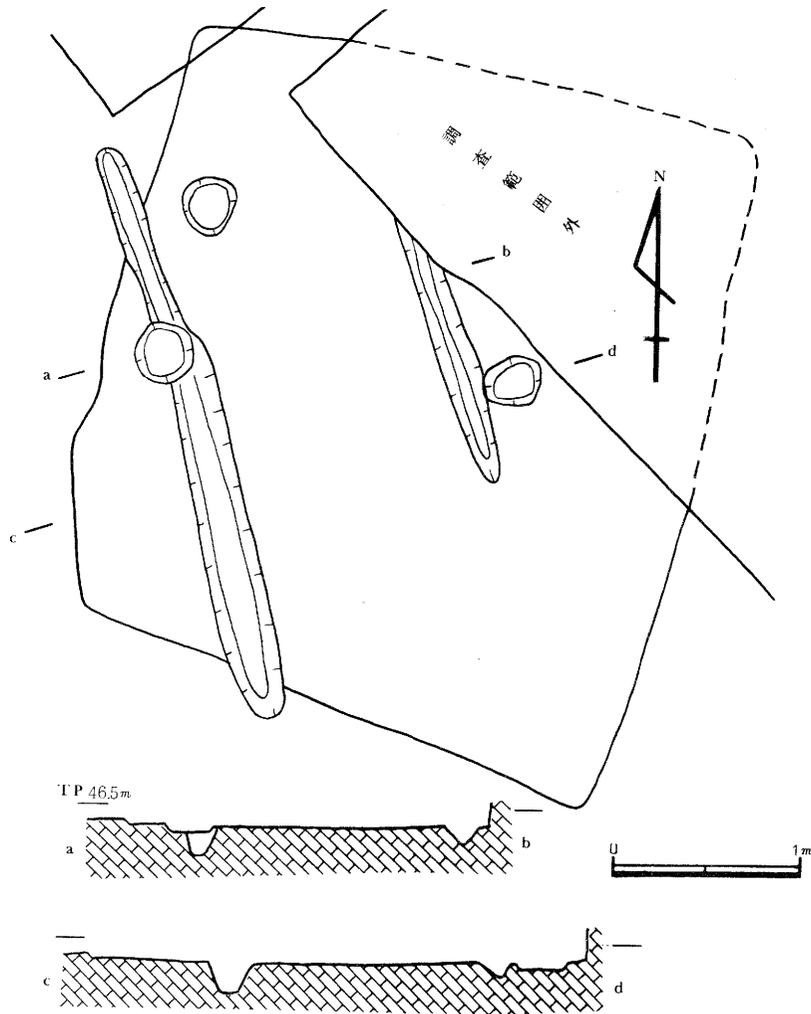


図-17 第2住居下層

第3項 土壙1、2

A地点西側端とB地点東側端から検出された土壙で、つながりが予想される。

土壙1は、南北5m、東西6mを測る。埋土は、黄褐色粘質土の中に2~3mm程度の砂粒を含む灰褐色砂質土がこぶし大の大きさでブロック状に混入している。土壙の深さは、20数cmを測り、底面はほぼ水平を成す。南側には径2mの不定形な落ち込みが見られた。この落ち込みの深さは約20cmで、埋土は、黄白色粘質土である。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦および石鏃がある。土師器、須恵器については細片であり時期を明確にしえない。瓦は、平瓦と軒瓦が少量出土した。石鏃については縄文時代の遺物と考えられる。

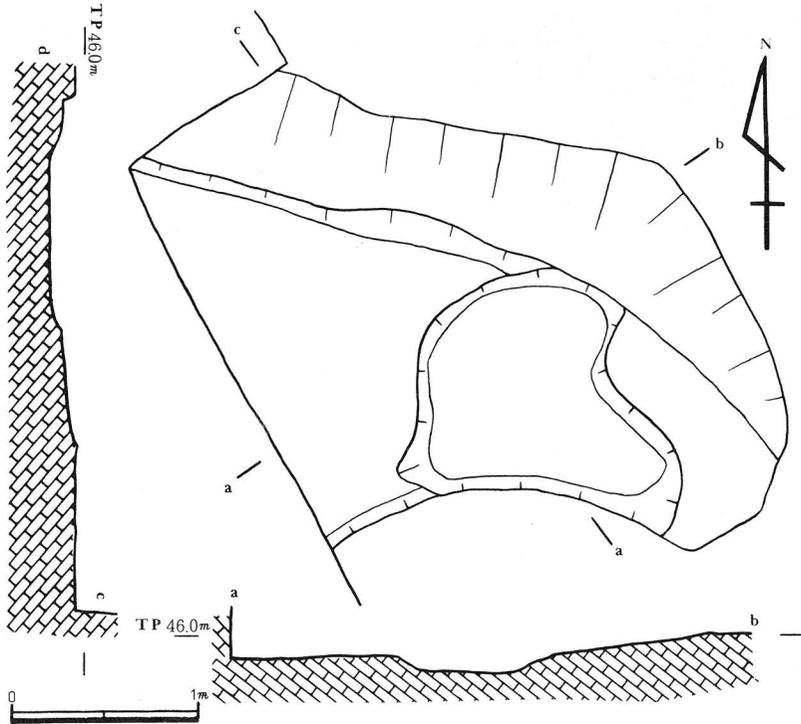


図-18 土 壙 1

土壙2は、南北10m、東西4m、深さ15~20cmを測る。埋土は、土壙1と同様に、2~3mmの砂粒を含む灰褐色砂質土が黄褐色粘質土中混入している。底面は平坦である。土壙1より約50cm下段にあるが、千枚田を造る時に中間部が削平されており、方向や埋土から推察して同一遺構になる可能性がある。全体の形状は、横幅5m、長さ22m、面積にして110㎡を測るもので



土壙1出土の軒丸瓦

ある。南北方向からやや西にかけて緩く円弧状に描く。これは自然地にそっているようである。また、南側の方には、この土壙に向かう溝が見られ、さらに溝の先には、瓦窯2基存在する。この土壙との距離は、約30mである。

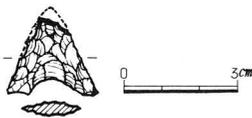


図-19 石鏃実測図

瓦 軒丸瓦が1点出土している。複弁6葉で明瞭な間弁を配している。内区と外区の間には一条の圈線がめぐられ、外区には線鋸齒文が施されている。全体に黄白色を呈し、極めて軟質な焼きであり、風化も甚しい。なおこれは、河内国分寺出土の瓦のうち最古の型式のものと同型である。

石鏃 先端をわずかに欠損するがほぼ完形、サヌカイト製である。

第4項 溝1、2

溝はA、B地点でそれぞれ各1本検出された。

溝1は、A地点南端から北方へ向けて伸びる溝で、大きさは、幅60cm、深さは10cm、長さ7m以上である。北端で自然消滅している。

基本層位は、20~30cmの表土下に黄褐色粘質土（遺物包含層）があり、この土層除去後に検出された。溝の埋土は、灰褐色砂質土である。出土遺物はなかった。遺物包含層中、瓦の出土がわずかに見られたが、瓦は、溝1と土壌1の周辺に集中している傾向がある。溝は東から西に傾く斜面地に直交しており、人為的な性格を有するものと考えられる。

溝2は、B地点北端に位置し、東から西に向けて伸びる溝で、西端が調査区外に続き全容を知る事が出来なかった。現長は、幅80cm、深さ20cmの掘方逆台形を成し、長さ3.5m以上の真直ぐな溝である。方位は磁北より東へ45度傾き、直ぐ横に検出された建物とは平行しない。層位は、黄褐色粘質土（遺物包含層）の下層に地山掘削されており、埋土は、黄褐色砂質土である。出土遺物はなく、時期を示すものがないが、包含層から7、8世紀及び中世の遺物が出土している。

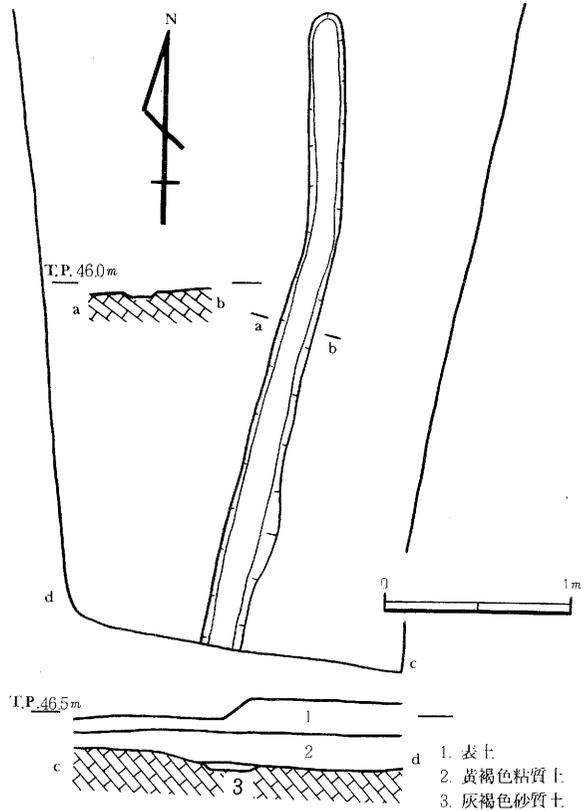


図-20 溝 1

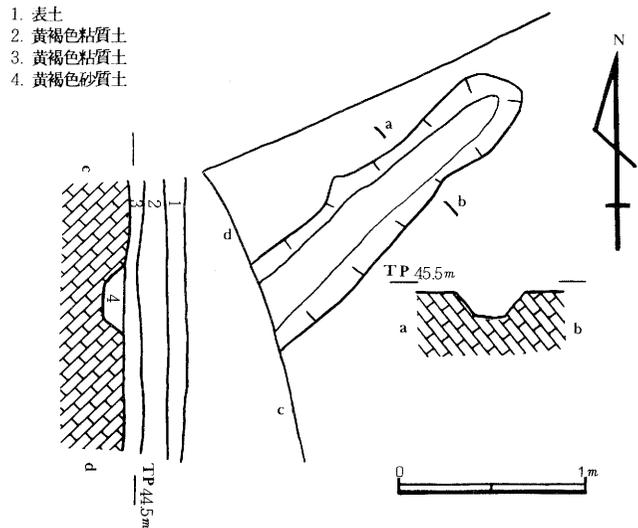


図-21 溝 2

第5項 ピット群

B地点南側にピット群を検出した。ピット数は計9個である。黄褐色粘質土（遺物包含層）除去後に地山（黄褐色粘土）に掘り込まれ状態で検出した。ピット埋土は黄茶灰色砂質土ですべてのピットに共通している。

ピットの形状、規模にばらつきが見られるが、一辺20～35cmの方形を呈している。

内6個のピットは、ほぼ北向きに、八の字型に拡がる様子が見られるが、2間×2間の掘立柱の建物が考えられる。建物推定床面積は、7.68㎡である。

掘り方形態は、U字形、逆台形

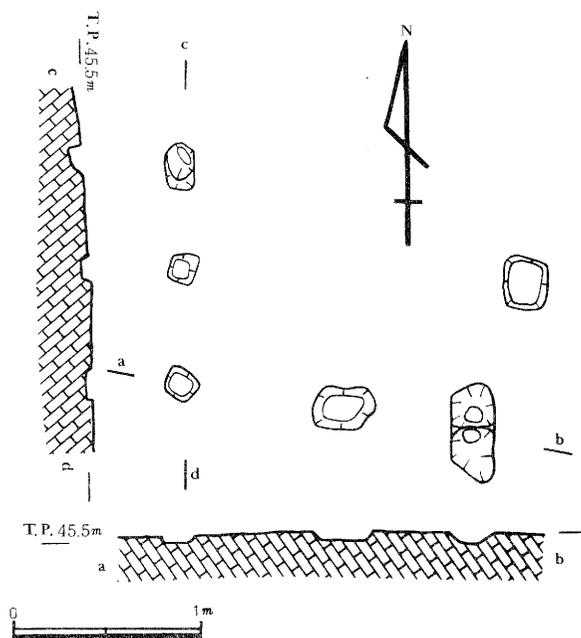


図-22 建物跡遺構図

で、南東隅のピットは柱の抜き取り跡と考えられる。ピット中から出土した遺物はなく、また、遺物包含層も細片が多く時期を明確に出来なかった。

第6項 包含層出土の石器

翼状剥片1、有舌尖頭器1が出土している。いずれもサヌカイト製である

1は形よく整った翼状剥片である。剥離に際しては、あらかじめ全体が山形になるように打面調整を行なっている。打面部中央の加撃点付近には自然面を残す。一端は折損する。また、刃縁には細かな剥離が認められ、剥片の状態で使用された可能性がある。

2は有舌尖頭器である。逆刺部の大部分と舌部を欠損する。やや内湾気味の両側縁はほぼ対象である。身部の下端で最大幅を測り、逆刺は鈍角に切り込んでいる。全面にやや不規則な並行剥離を基部から先端に向かって行い、さらに側縁に細かな調整剥離を施している。

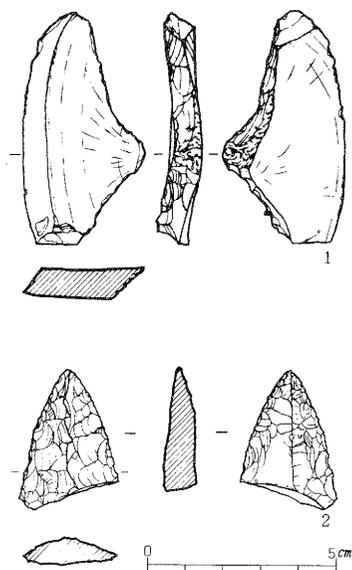


図-23 包含層出土旧石器実測図

第3節 ま と め

田辺地区の文化財の調査は、昭和46年、大阪府教育委員会による田辺廃寺の発掘調査がある。保存整備をなす目的による調査であるが、南大門、東西両塔、金堂を中心とする薬師寺式伽藍配置を持つ古代寺院として世に知らしめ、学問的にも、規模、時期そして後背氏族を明確にした意義が大きいものがある。また、この結果を踏まえ、昭和50年、史跡指定を受けている。

その後、田辺廃寺を中心とする周辺地区の分布調査が成され、弥生時代から奈良時代までの長期間に渡る複合遺跡である事が知れるに至り次第に、文化財愛護の気運が上がり、また、熱心な文化財保存に尽力した地元郷土史家の活動も大きく貢献し、住宅建築等による開発が進む中で、昭和55年から、大阪府教育委員会および柏原市教育委員会による発掘調査が実施されるようになった。以来、数度の調査が成され、漸次その成果が得られてきている。

田辺遺跡は、四方を丘陵、山地が取り囲み、標高200mを測る明神山系から派生する台地上に形成され、西側には原川、北側には大和川が流れ、風光明媚なところでもある。

田辺遺跡の北東端には、松岳山古墳に代表される前期の古墳群が在り、さらに東側には、芝山古墳群を擁する。また、原川を狭んで西側には、前期に属する大古墳10数基を有する玉手丘陵が見られるところから、中・南河内地方では、古墳の築造が先行する地域である。

遺跡内では、国分中学校西古墳、伝田辺史伯孫墓(いなり山古墳)そして、その南側に円墳が在り、合計3基が旧知されていたが、先般、後期から終末期にかけての古墳群が新発見され、さらに多くの古墳が見つかる可能性を示唆した。今後、周辺の前期古墳を含め、その変遷や葬られた人々の系譜を辿る事が重要な課題である。

今回の調査地点は、田辺池の東側にあたり、古墳群が新発見された同じ丘陵の北側百数十mに位置する。田辺廃寺とは、谷を隔てて向側のほぼ同一標高の丘陵西斜面地である。

調査区内より古墳時代後期の堅穴住居を2軒検出した。第1住居は、床面に多くの遺物が出土した。凶化出来たものは少ないが、おおむね7世紀前半の時期が当てられる。しかし、中には6世紀代の遺物や住居上層部に中世の遺物も出土しているところから、長期間にわたり使用された事を示す。畿内では堅穴住居が終焉を迎えた時期でもあり、この時期まで継続して存在したのはこの住居の特異性を示すものかもしれない。また、この住居から出土した遺物は、杯甕、高杯、擂鉢等日常雑器の他に、砥石、鉄製品、鉄滓が出土した。砥石は3個出土し、砥石面は平滑でよく使用されており、それぞれ共通な点として断面U字形をした真直ぐな幅0.8cm位の溝がみられる。このような溝のある砥石は、玉類の研磨に使用される事が多いようである。しかし、今回の調査では住居内からの玉類の製品、未製品は出土していない。鉄製品については、1片だけで遺存状態も悪く小刀の破片と考えられるが、鉄滓や砥石との組み合わせから何らかの工房に関係した遺物の可能性もあろう。鉄滓は、小片であるが鉄分の多いものであり、同住居内のかまどがある事から小鍛冶を行なった公算が強い。

今回検出した堅穴住居については、台形状の形態を呈して玉類の工房址としての条件も具えて

いる。第2住居についても同様に台形状の形態をとるものと考えられ、出土遺物については何ら得られた成果がなかったが、住居下層から検出された溝の性格については、特異性として注目しておきたい。今後、周辺地域の調査の課題としてこれらの疑問点を解明していかなければならないだろう。

A、B両地点から土壌が検出された。この土壌の性格について考えられる点を2、3述べておきたい。1点目は、当調査区南側近隣地に瓦窯2基発見されており、その瓦工房としての遺構が近くに存在する可能性が考えられる事である。当地区は良質の粘土が産出し、瓦生産に適している。この土壌は、瓦片の出土もあり瓦生産のための粘土採掘の可能性がある。2点目は、瓦窯と同一標高であり、地形的な条件からも容易である。3点目は、地山の粘土は非常に粘性が高く瓦生産には砂粒の混入が必要である事が考えられる。土壌内の埋土には、人為的な粘土と砂粒を混ぜ合わせた状態がみられ、その混ぜ合せた粘土は出土瓦の胎土と類似している。以上の点からこの土壌は瓦生産に結びつく可能性が高いといえよう。

調査区内から、旧石器時代と縄文時代の石器が計3点出土した。以前から当地区での発見が予測されていたが、洪積層の台地の先端部分でもあり、今後、この時代に関わる遺構、遺物の検出に期待がかかる。

注

柏原市史 本編(I) 第2巻	柏原市役所	1973. 3
田辺廃寺跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1972. 3
河内国分寺跡発掘調査概要	〃	1970. 3
ふたがみ	同志社	1974. 3



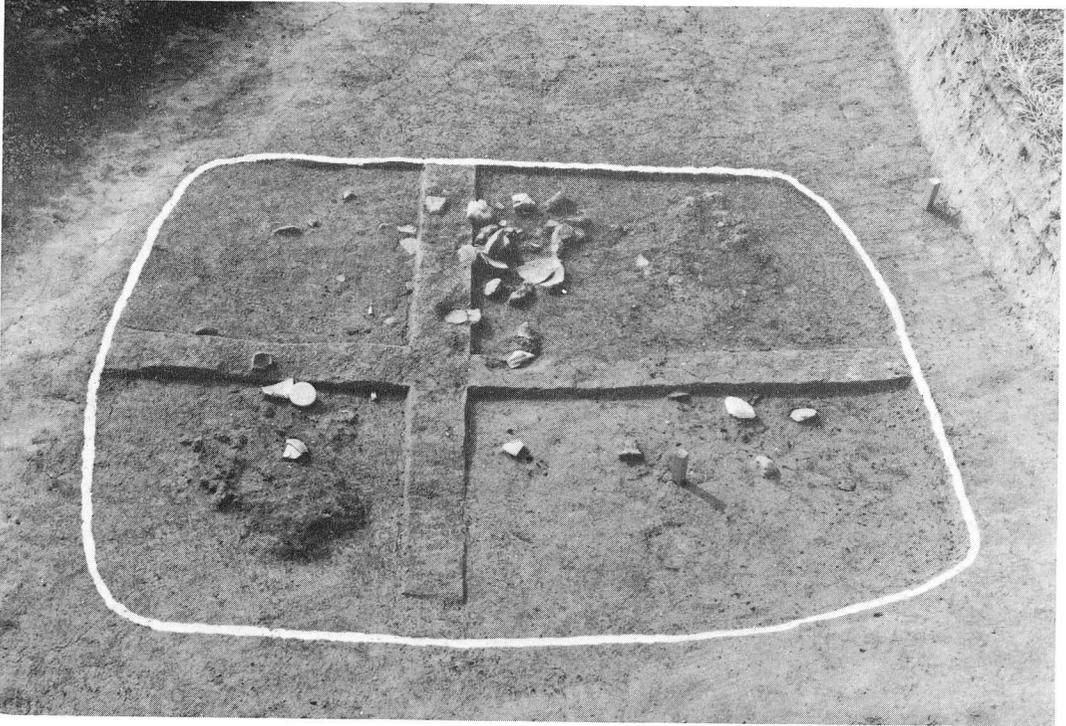
調査区全景



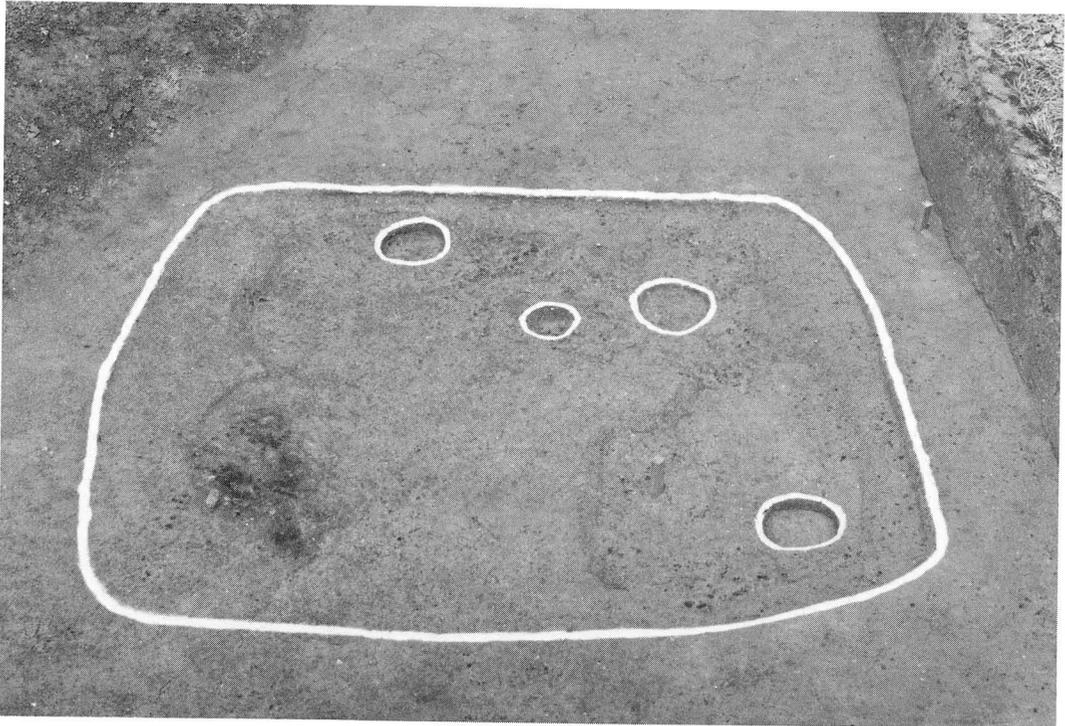
A 地点 全 景 (北から)



B 地点 全 景 (北から)



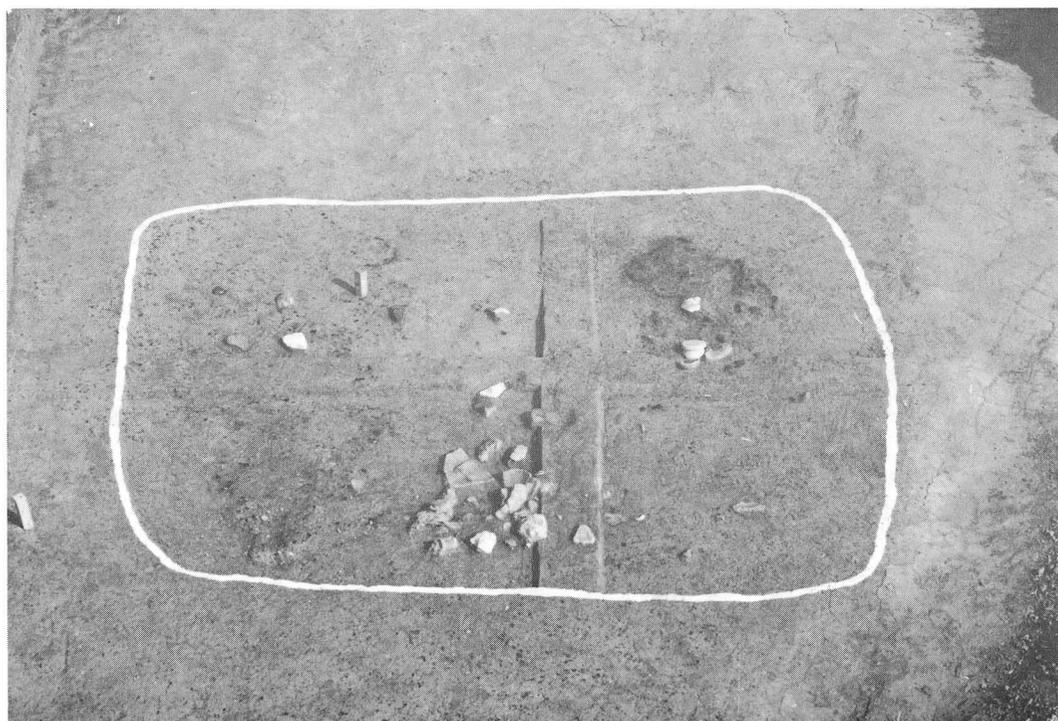
第 1 住 居 上 層 (南 から)



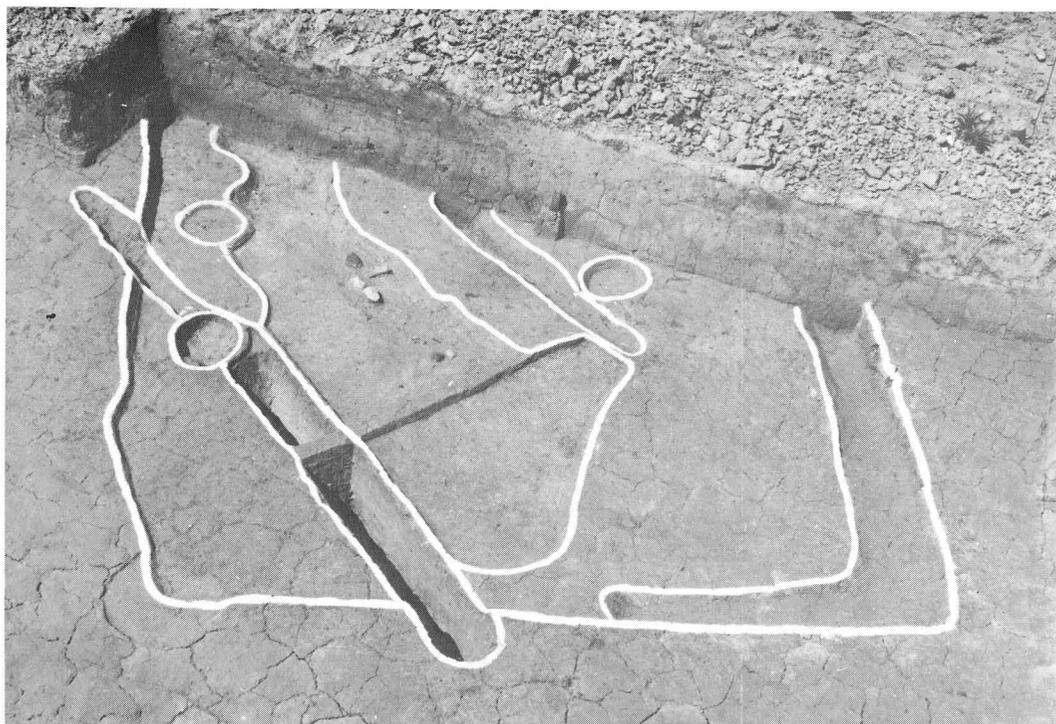
第 1 住 居 下 層 (南 から)



第 1 住居遺物出土状態



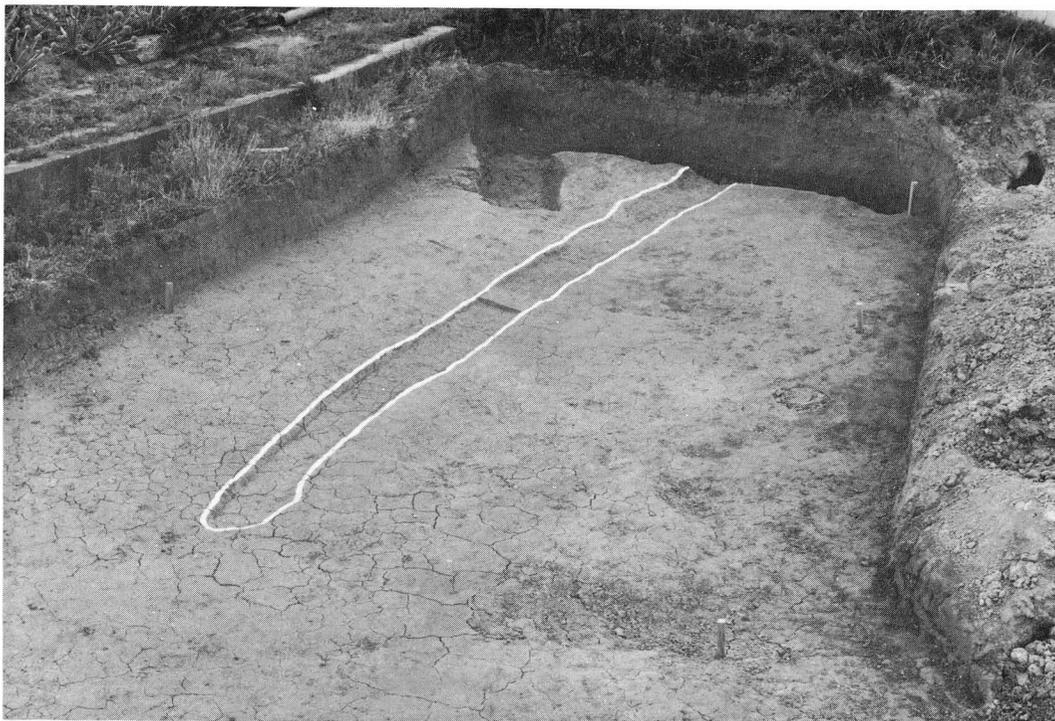
第 1 住居（北から）



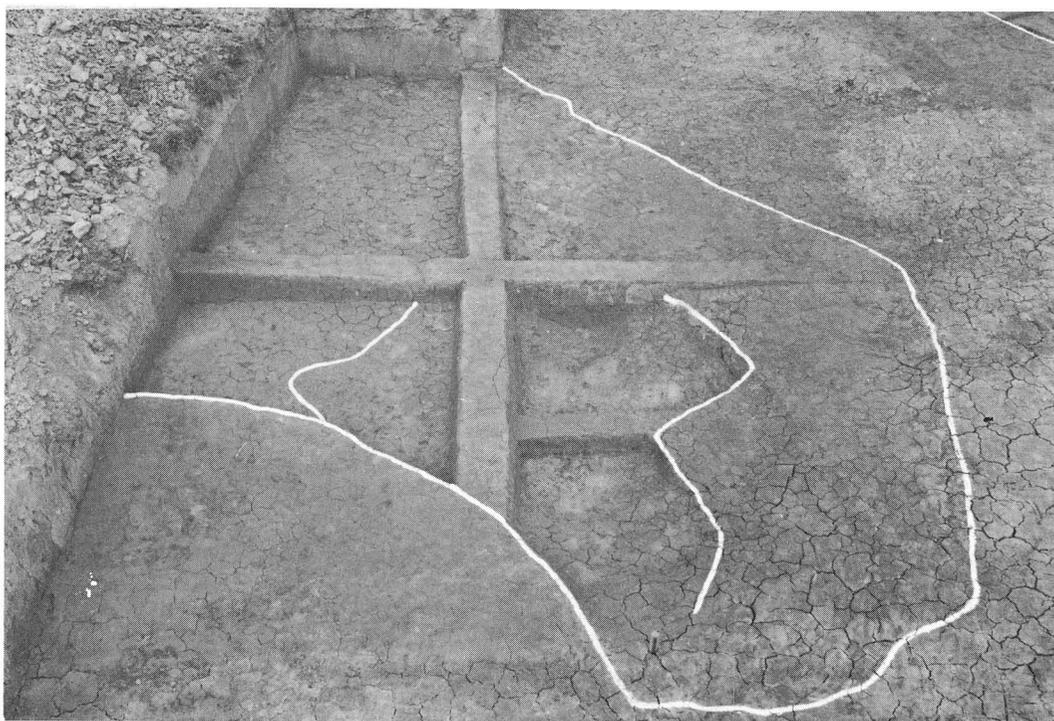
第 2 住 居 (西から)



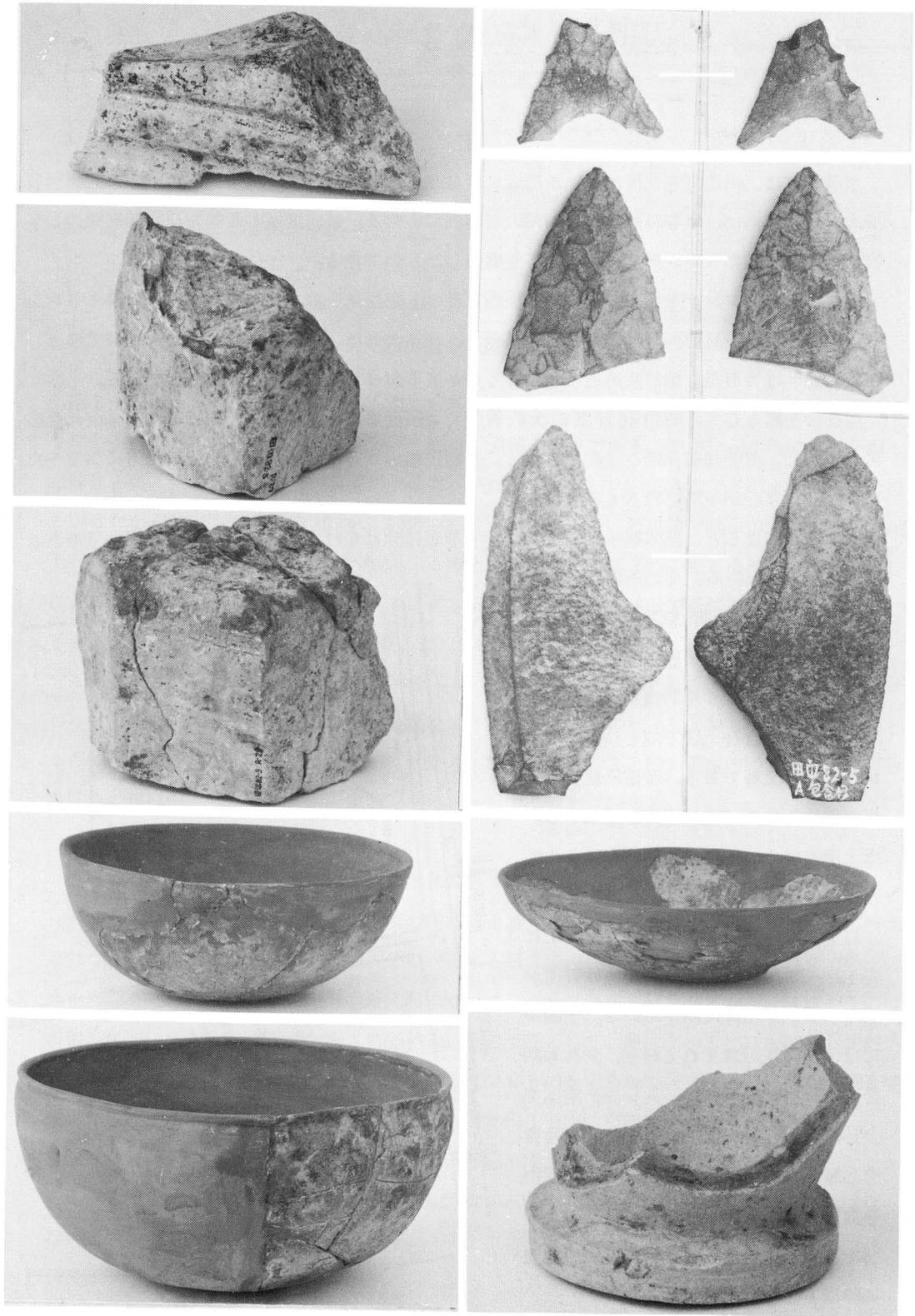
建 物 と 溝 2 (北から)



溝 1 (北から)



土 壙 1 (南から)



第 1 住居出土遺物と石器

第3章 田辺遺跡 その2

第1節 概 要

当調査区は、田辺廃寺北接地の宅地造成に伴なう工事に付随した下水管渠埋設工事の立会調査である。調査地は、現春日神社の北側部の道路内にあたる。造成区域の西側及び南側周縁のL字状に約1.0m幅のトレンチで、断面観察を実施したものである。

南北方向のトレンチを第1トレンチ、東西方向のトレンチを第2トレンチとした。第1トレンチは、田辺廃寺寺域の西側端部にあたる場所で、自然地形は、東側の方へ平坦地が伸びてゆき、西側の方へは当道路を傾斜変換点としてゆるやかに下がってゆく自然地形を成している。

当初の予測として、昭和46年度の大阪府教育委員会による発掘調査で田辺廃寺寺域復元を参考にすれば、主要伽藍を囲む回廊にあたる。左右両塔の後方に金堂が建ち、その後方に講堂や食堂等建物の存在が予測されるものである。

断面観察によると、基本層序は大きく分けて3層に分けられる。上層は現道路の盛土であり、約30～40cmを測る。その下層は、茶灰色砂質土(2)と黄褐色粘質土(4)が約40～50cmある。茶灰色砂質土は、ほとんど遺物を含まなく時期は不明であるが、わずかに炭を含む土層で畑として使用されたような土層である。黄褐色粘質土は瓦の破片を含み地山の土層と類似する。出土遺物はその他に土師器片も見られた。どちらの土層も2次堆積土層である。

最下層は、地山(黄褐色粘質土)上に約10～30cm堆積した薄茶褐色砂質土が第1トレンチ全体に伸びている。土層中には多量の瓦が含まれており、割れも割合大きい。この土層は、トレンチ南側で少し途切れ、茶灰色粘質土と茶灰色砂質土2層の堆積が見られた。ほとんど遺物を含まず、どのような遺構になるのか不明である。反対断面を見る限り東西方向に伸びる様子である。

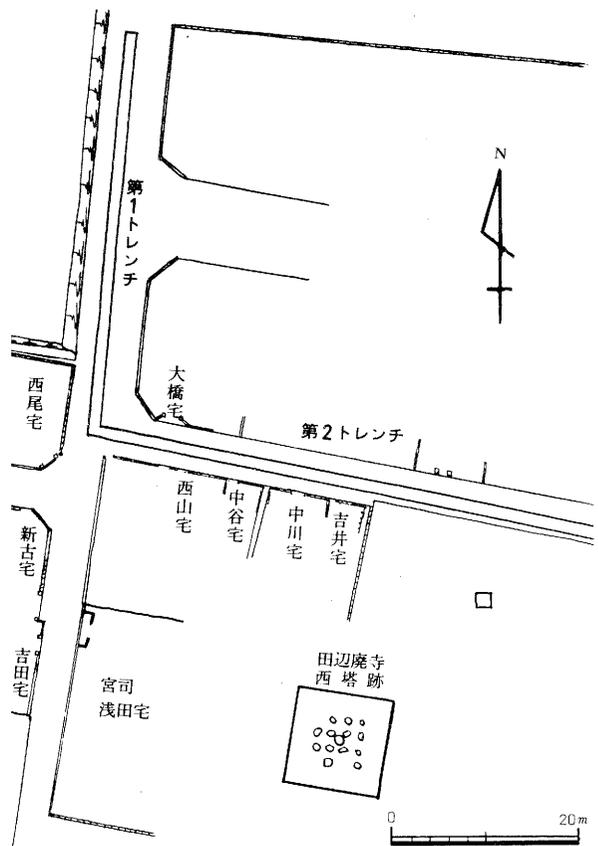
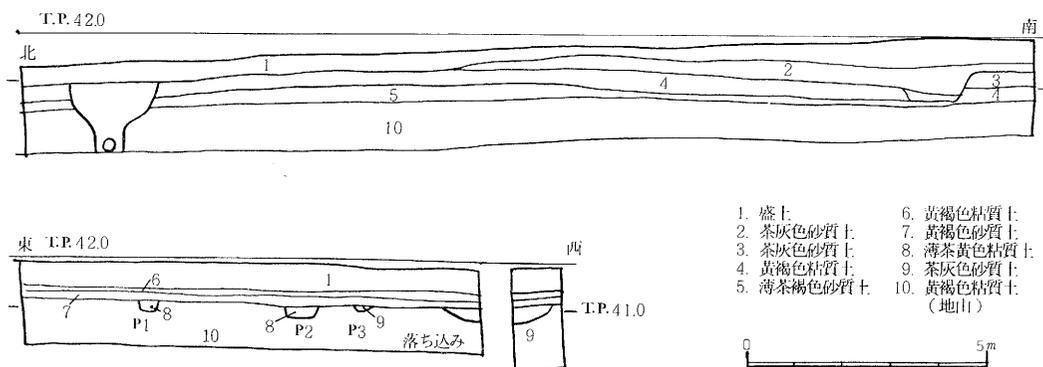


図-24 トレンチ位置図



図一 25 トレンチ断面図(上第1トレンチ 下第2トレンチ)

第2トレンチは、田辺廃寺西端から東へ横断するトレンチである。同トレンチもほぼ水平堆積を成し、基本層も3層に大別される。上層は現道路の盛土である。約40~50 cmの厚さを測る。上層除去後、先端を尖した杭が数本出土した。杭は径10 cmまでの丸太杭でどのような並びであるかはわからない。中層は約10 cmの黄褐色粘質土(6)である。無遺物で地山の土層に類似する。下層は約20 cmの薄茶褐色砂質土である。この土層下の地山上に3つの掘り込みピットを検出した。東側からピット1、2、3とすると、ピット1、2は方形ピットで底部形状も平坦を成す。ピット3は、円形である。規模は、40、70、40 cmで深さ25、25、15 cmである。埋土は、ピット1、2は茶黄色粘質土(8)、ピット3は茶黄色砂質土(9)である。ピット間の距離は、ピット1、2間は3.2 m、ピット2、3間は1.3 mである。またピット3から西へ約1.6 mのところへ落ち込みを検出した。深さ50 cmを測り、埋土はピット3と同じ茶黄色砂質土である。落ち込みの規模が明らかでないが、東西方向に3 m以上の拡がりがある。

第2節 ま と め

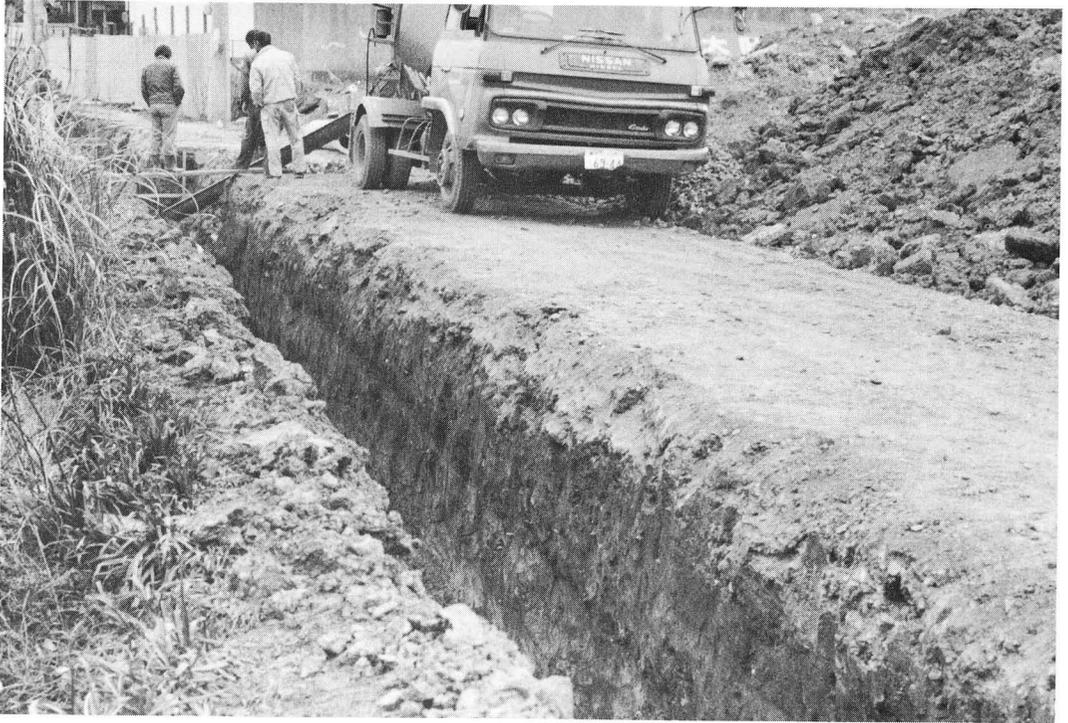
今回の調査によって、明らかにされた点について若干の説明を加えたい。

第1トレンチの調査から、回廊倒壊時の屋瓦片と考えられる多くの瓦片を含んだ堆積土が検出された。遺構が検出されなかったが、その状況からほぼ間違いがないであろう。これまでの田辺廃寺の調査では、東西両塔、金堂、南大門について位置及び存在を確認しており、寺域やその他の施設についてある程の予測が成されている。その予測として、南大門あるいは中門から北側へ延びる回廊は、金堂の後方へ回るか、講堂にとりつくものか明らかではなかった。今回の調査成果によって、金堂の後方(第2トレンチのある道路内)を回る可能性が少なくなった。

第2トレンチの調査によって、ピット3、落ち込み1を検出した。田辺廃寺の遺構(回廊)かその後(田辺廃寺廃絶後)の遺構が明確にしえなかったが、今後の調査の折考慮しなければならない遺構として特筆しておきたい。

注.

「田辺廃寺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1972. 3



第 1 トレンチ (南から)



第 1 トレンチ (北から)



第2トレンチ（ピット2）



第2トレンチ（ピット1）

第4章 平野・山ノ井遺跡

第1節 概 要

平野遺跡は、昭和44年、平野変電所の調査が行なわれ、弥生時代中期から古墳時代中期までの遺物包含層が確認されて、遺構についても大規模な溝状遺構が検出している集落遺跡である。しかしながらその調査結果が公表されておらず、以来周辺の調査もなく、遺跡の種類、性格、規模等についての資料はほとんどないに等しい。

山ノ井遺跡についても同様である。小規模な調査が行なわれているが、遺構は発見されておらず、弥生中期から中世までの遺物が出土しているだけにすぎず、これからの遺跡である。

これらの遺跡は、生駒西麓に間断なく形成される集落群の中の1つである。北には、恩智遺跡、神宮寺遺跡、南には、大泉遺跡、大泉南遺跡、太平寺遺跡等が見られる。しかし、これらの遺跡に共通している点として、山間部から花崗岩質の軟質な土壌が流れ出て厚く堆積している事があげられる。というのは、最近の土木工事が大規模になり次第に遺跡の包蔵地まで掘削されるようになってはじめて判明した事であり、遺跡自身良好な遺存状態である事を証明するものである。

今回の調査は、平野・山ノ井遺跡の中央部を南北に走る東高野街道内に、関西電力株式会社、日本電信電話公社が管路埋設工事を計画し、同遺跡内にあたることから埋蔵文化財包蔵地の発掘届出書を提出するとともに、柏原市教育委員会と事前協議を行ない遺物採集や遺構検出等必要な調査を実施する事に合意したものである。

柏原市教育委員会では、両遺跡の実態を把握するために基礎資料を作製する必要から、交通量の多い



図-26 調査区付近地図

道路敷内の調査であるが、関西電力株式会社、阪上誠次、伊藤誠一氏、日本電信電話公社、笠井修三氏、近畿電気通信局及び各現場担当者との連絡を密にし、安全上は言うに及ばず調査成果を得るための無理を色々お願いした。

調査方法は、上層の盛土を機械掘削し、遺物包含層は手掘りによる調査を行ない、写真及び記録の作製を行なった。調査区は、東高野街道内を 2×4 mのグリッドによる調査で、南側から第1～5調査区とした。調査期間は、昭和57年7月6日から9月18日までである。

第2節 調 査

第1項 第1グリッド

調査範囲は、約 2×4 mの方形区画の範囲で第1グリッドとした。層序は、現道路の盛土が約1.0 m見られ、その下層に、各30～40 cmの厚さを測る青灰色粘質土と茶灰色粘質土が堆積している。両土層中から土師器、須恵器が出土した。土器片は端部がよく磨滅しており周辺からの流れ込みと考えられた。その下層は、茶灰色砂質土（土質はシルトに近い）である。この土層上面において、ほぼ南北方向を向く溝を検出した。規模は、溝の東側肩部だけを検出したにとどめたので不明である。検出幅は、約0.8 m、長さ4.0 mである。埋土は青灰色砂土で、深さは10～15 cmを測る。茶灰色砂質土を掘り下げると、茶褐色砂質土が見られ、同土層上面で、上層の溝と同一方向の溝を検出した。この溝は、上層の溝より肩部が東側に拡がっており、状況としては同様に東側の肩部だけの検出であった。検出幅は、約1.5 m 長さ4.0 mである。溝の埋土は青灰色砂土で、深さは35～45 cmを測る。茶褐色砂質土層は、小礫を含む堅い土層であり、旧道路敷であると考えられる。同土層中からは、土師器、須恵器の細片が見られたが、時期を明らかにするものは出土していない。厚さは約40 cmである。

さらに、約40 cmの灰青色粘質土下に暗青灰色粘質土が見られた。同土層は弥生時代の遺物包含層である。調査深度が限度になり中止せざるを得なかったが、土層中には割合密に弥生式土器が包まれていた。

第2項 第2グリッド

調査範囲は、 2.7×4.4 mの方形区画で、第2グリッドとした。層序は、現道路の盛土が約90 cm有り、この土層下に近世の道路面を検出し、道路西側に添うように溝が見られた。溝はその東側肩部だけを検出したにとどめたが、幅1.9 m以上である。埋土は青灰色粘質土である。砂土はあまり見られなかった。同埋土上面では、径8 cmの自然丸太を使用し、東側肩から約90 cmの間隔でほぼ南北方向に約60 cmの等間隔の杭列を検出した。それぞれ出土遺物はなく時期を明確に出来なかった。青灰色粘質土の下層から旧道路面を検出した。非常に堅く版築した土層で、主に茶褐色砂礫土である。礫は0.5～5 cm大で小礫が多い。茶褐色砂礫土の厚さは約30 cmである。遺物の包含が少なく出土しても細片で時期を明確に出来なかった。

道路敷の下層には、灰青色粘質土を薄くサンドイッチ状に狭んだ灰青色砂土が約45 cmの厚さ

で見られた。この砂の堆積は、氾濫時又は川の流れによる堆積を思わせる。この砂層下に木道を検出した。この木道は、横巾1.0～1.5mで南北方向に伸びるもので、径2～10cmの自然丸太を横位に並べている。丸太は1～2重の重なりが見られる。また、丸太の下には、松葉や松笠あるいは広葉樹の葉などが部分的に敷かれている。この木道は、どのような用途から製作されたのかは不明であるが、下層の堆積土中から須恵器が出土しているところから、古墳時代後期に属する時期が考えられる。往時の環境復元に好資料を提示するものである。木道の下層には青灰色砂質土、緑灰色粘質土がある。青灰色砂質土は約25cm、緑灰色粘質土は約60cm以上である。緑灰色粘質土中には弥生式土器が出土した。第1グリッドのような遺物包含層はなく、集落の縁辺部という状況である。

第3項 第3グリッド

調査範囲は、2.0×4.4mのグリッドである。層序は、現道路の盛土が約80cmみられ、その下層に青灰色粘質土、茶灰色粘質土がそれぞれ30～40cm堆積している。これらの土層は無遺物である。その下層には炭層及び炭を割合多く含む青灰色粘質土が約30cmの厚さで広がる。また、その下層は、淡茶灰色砂質土である。この土層中から土師器、須恵器の細片が出土し、第1、2グリッドで見られた道路敷と対応するものと考えられる。しかし、この土層は版築や堅緻な堆積状況はみられなかった。その下層は、何層かの青灰色粘質土をサンドイッチ状に挟んだ青灰色砂土が約1.4mにわたり堆積している。その中間層では、径4～12cmの自然木丸太を30～40cmの間隔をあけてほぼ平行にして横位に並べた遺構である。自然木は約20～40cmに切断して並べている。方向は、ほぼ東西方向である。どのような性格のものかは全く不明である。

青灰色砂土中には、須恵器片（上層）と弥生式土器が出土し、その他に自然木等も混入しており、溝又は氾濫源等の堆積土と想定される。地山は、青灰色粘土で、標高11.8mである。

第4項 第4、5グリッド

2.4×4.4、2.4×4.0mの範囲である。第4グリッドの層序は、上層から、盛土が約1.0m、暗青灰色粘質土が約30cm、茶褐色砂質土が約40cm堆積している。第1、2、3グリッドで見られた道路敷である。その下層は青灰色砂土が約1.3mの堆積である。ほぼ水平堆積を成し、同一時期のものではなく、薄く粘質土が入ったり砂層も何層かに分けられる。中には赤褐色砂土と炭を含む層も見られ、遺構面が存在する可能性もあろう。最下層は、薄灰青色粘土である。地山であると思われる。この薄灰青色粘土上に幅約20cm、深さ約30cmの溝を検出した。溝の方向は、ほぼ道路に平行し、東へ20°傾く。埋土は灰青色砂土で無遺物である。青灰色砂土の最下層から板状の木片が出土した。加工が施こされており、その性格等は今後の調査によらざるを得ない。

第5グリッドは、第1～4グリッドと異なり道路敷土層がなく、厚い砂層の堆積が見られた。分層可能であるが、遺構状のものは検出されなかった。

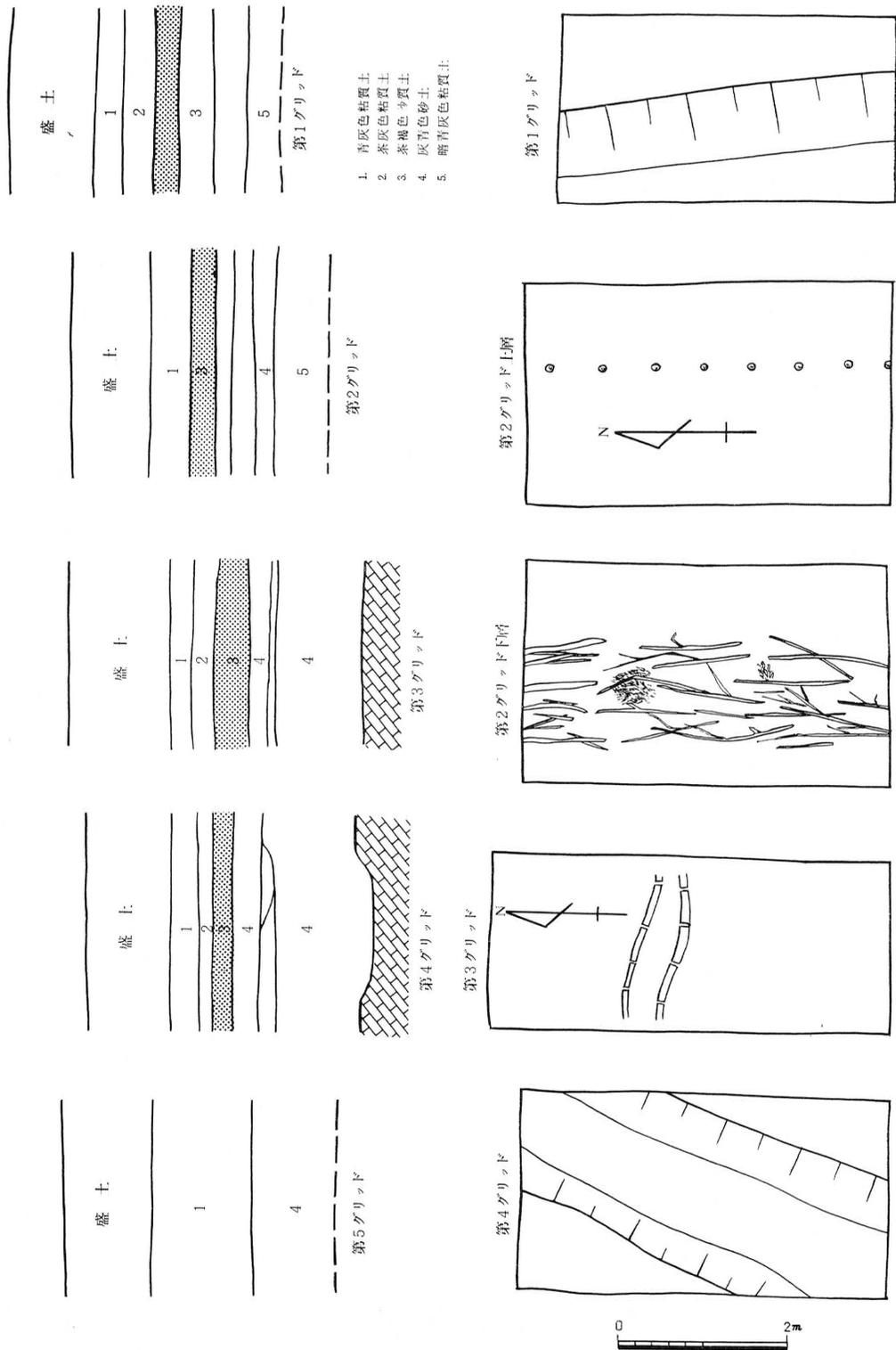


図-27 第1～5グリッド遺構図

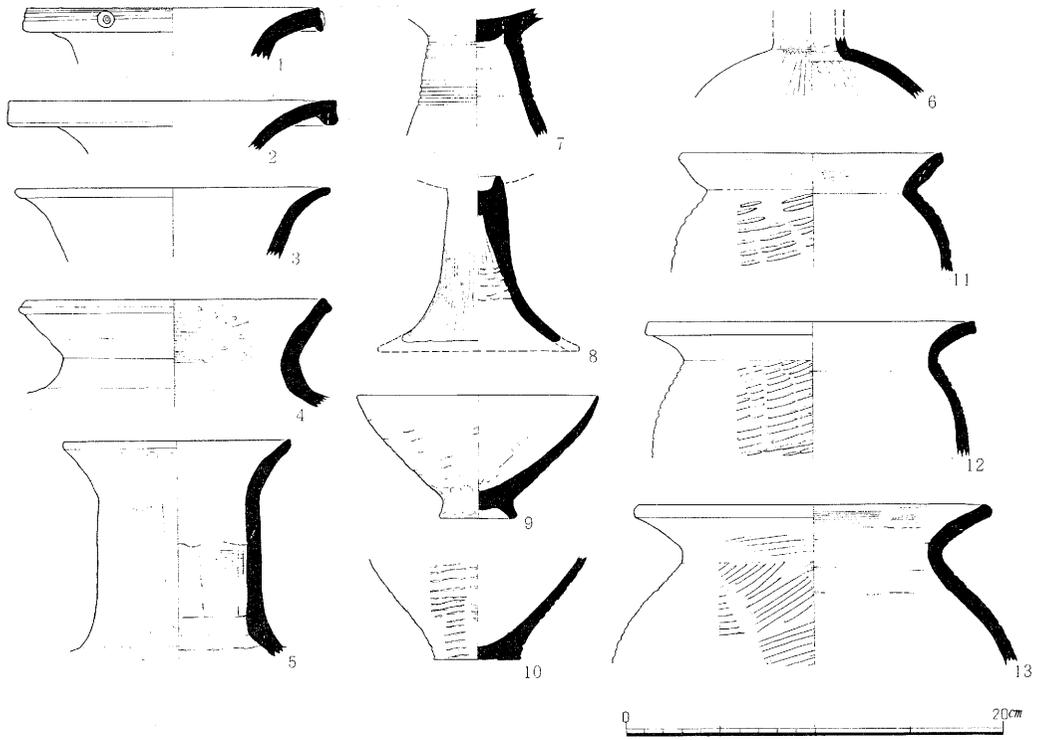


図-28 第1グリッド出土の弥生式土器

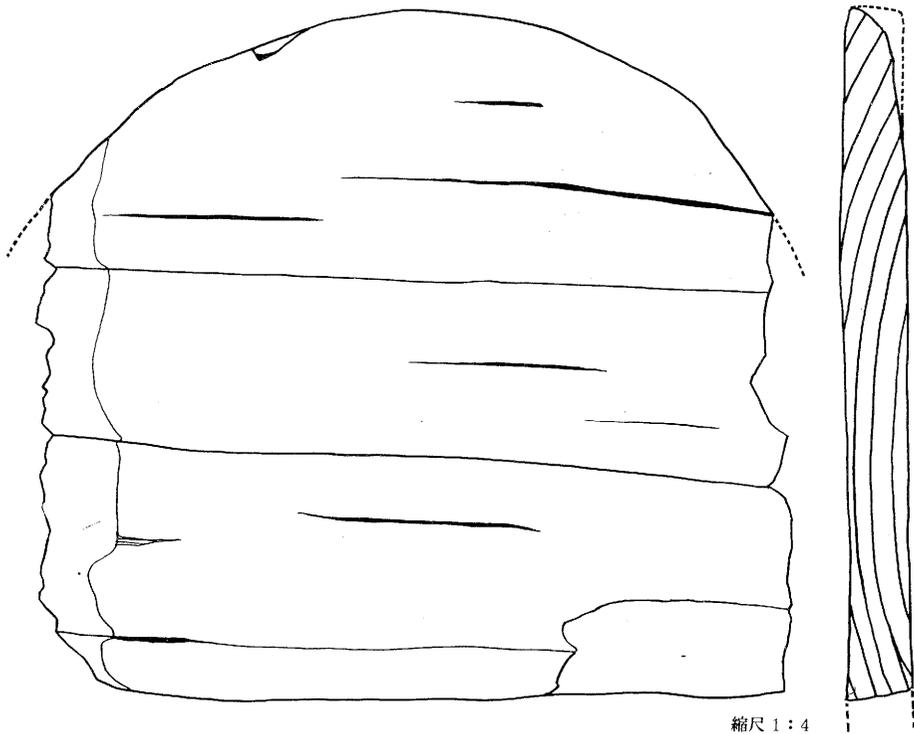


図-29 第4グリッド出土の木製品

第1 グリッド出土弥生式土器観察表

№	器種	法量 (cm)	形態	技法	色調・胎土その他
1	広口壺	口径：15.5	口縁部は大きく外反する。端部は下方に拡張する。端部には退化凹線を巡らせ、竹管を刻した円形浮文を貼付する。	口縁部内外面ともナデで仕上げる。	・茶灰色 ・石英、長石、角閃石、雲母が多い。 ・赤色顔料を塗布した痕跡がある。
2	広口壺	口径：17.1	口縁部は大きく外反する。端部は下方に折り曲げて拡張する。無文。	口縁部内外面ともナデで仕上げる。	・茶灰色 ・石英、角閃石、雲母が多く、くさり礫をわずかに含む。
3	広口壺	口径：16.7	口縁部は大きく外反する。端部は肥厚せずそのまま丸くおさめる。	内外面とも磨滅。	・茶灰色 ・石英、角閃石、雲母を多く含む。
4	広口壺	口径：15.8	頸部は短く、胴部からゆるやかにつながる。口縁部は「く」の字に外反し、上半部でわずかに内弯気味となる。端部はわずかに肥厚し、平坦面をなす。	外面はナデ。頸部内面は荒いヨコハケの後、ナデ。口縁部内面は横位のヘラミガキ。	・明橙色、一部茶灰色。 ・石英、雲母、角閃石を多く含む。
5	長頸壺	口径：12.0 口頸部高：10.9	筒状に伸びた口頸部は口縁で大きく外反する。端部は丸くおさめる。	外面は縦位のヘラミガキ。内面はヨコハケの後、ナデ。	・明茶色 ・石英、角閃石、雲母を多く含む。
6	細頸壺	頸部径：3.8 (下端)	体部は丸く大きくふくらむ。頸部は筒状をなす。	外面は頸部、体部ともヘラミガキ。内面はナデ。	・(外面)茶灰色 ・(内面)灰黒色 ・精良だが、くさり礫をわずかに含む。
7	高杯 (脚部)	脚柱径：5.0 (上端)	脚部は中空。上端は円盤を充填する。脚柱上半部の2ヶ所に3条、4条の櫛描直線文を施す。	杯部内面、脚柱外面はナデ。脚柱内面は不調整。	・明茶色 ・石英、角閃石、雲母を多く含む。 ・転用の可能性。
8	高杯 (脚部)	脚柱径：3.1 (上端)	脚部は中空。裾部は大きく開く。	外面は縦位のヘラミガキ。裾部内面はナデ。脚柱内面には爪形がのこる。	・茶灰色 ・石英、角閃石、雲母を多く含む。
9	鉢	口径：12.7 器高：6.5	体部は斜めにまっすぐ開く。底部は小さく、上げ底になる。	体部外面はタタキ目の後、ナデ。底部は強いユビナデで整形。内面はヨコハケの後ナデ。	・茶灰色 ・石英小粒と角閃石、雲母を含む。
10	甕	底部径：4.6	残存する体部は斜めにまっすぐ開く。底部は比較的薄い。	外面は底部までタタキ目(2.5本/cm)。底部輪台の痕跡がある。内面はヨコハケの後ナデ。	・茶黒色 ・石英、角閃石、雲母を含む。くさり礫もわずかに混じる。
11	甕	口径：13.5	口縁部は「く」の字に屈曲。端部は丸くおわる。	体部外面は2.5本/cmのタタキ目。口縁内面は荒いヨコハケ。体部内面はナデ。	・明茶色 ・角閃石、雲母多く含む。くさり礫も少量含む。
12	甕	口径：17.0	口縁部は「く」の字に屈曲。端部は平坦面をなす。	体部外面は2.5本/cmのタタキ目。内面はていねいなナデ。	・明茶色(焼付着) ・石英、長石、角閃石を少量含む。
13	甕	口径：18.0	口縁部はゆるやかに屈曲する。端部は丸くおわる。	体部、口縁下半部は2.5本/cmの雑なタタキ目。口縁内面はヨコハケ。	・茶灰色 ・石英、長石、角閃石、雲母を含む。くさり礫は少量。

第3節 ま と め

今回の調査は、平野・山ノ井両遺跡にわたり、旧国道170号線（東高野街道）の道路内の調査である。面積的に狭少であったが、遺跡自体畜積した資料が少ないところから、環境復元等多くの貴重な資料が得られたと思う。

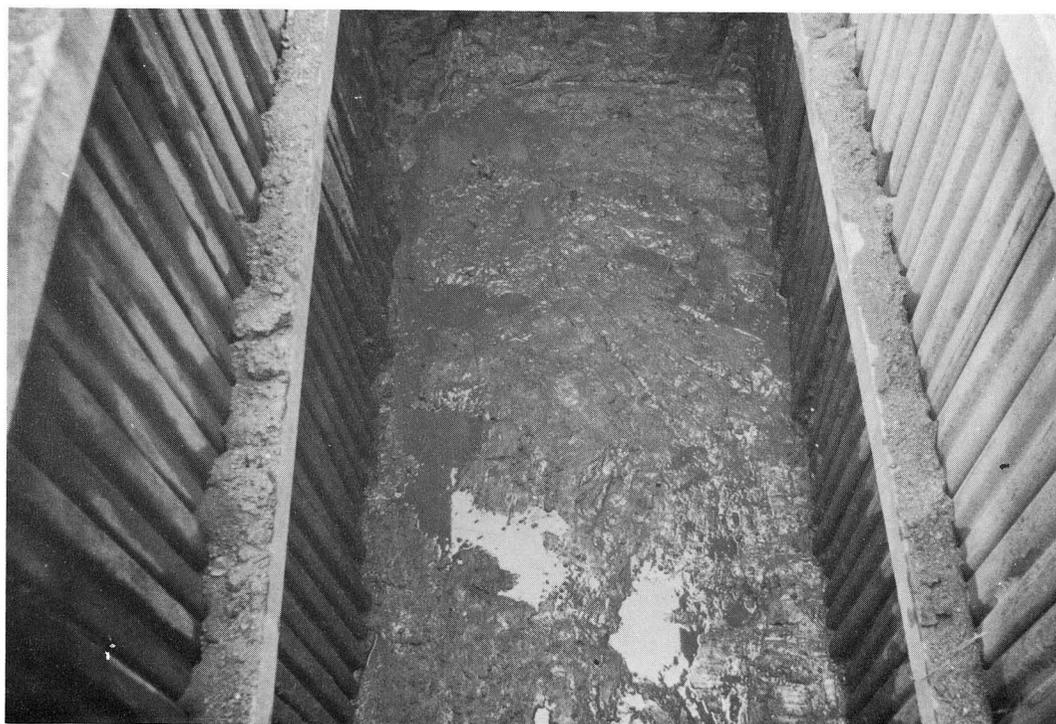
各遺構について記すというより全体的な関連性の持つものに限り述べていきたい。まず、当道路の歴史的な変化というか変遷である。大きく分けて3つの変遷が認められる。1つ目は、現道路である。旧国道170号線という事で、拡張や盛土及び舗装が行なわれ一番堅固な道路である。2つ目は、東高野街道と云われる素地となった旧道路である。東高野街道といわれは、庶民に教育の門戸を開いたことで庶民の間で大師（弘法大師）信仰が起り弘法大師つまり空海が建立した高野山金剛峯寺（和歌山県高野山）への参道として名付けられた街道である。この道路は、地表下1.5～2.0mの下層から検出され、堅く敷き締められた道路で約40cm弱の厚さの堆積土が見られた。この堆積土は1mの層を検出した調査例もある。この道路は、補修や盛土が施された形跡が認められるかなり整備のいきとどいた道路である。律令体制下において条理制がひかれるが、当道路の西側にはその区画が今も遺っており、条理の区画道路にも該当しているところから奈良時代に既に存在していた事が明らかである。最近の調査では、この初期の道路が古墳時代後期にさかのぼる時期の可能性も見い出されている。今後は、この道路東側に存在する業平街道との関係や河内六大寺との関連性とも考慮して追求していきたい。それにしても、このような古道が、歴然として遺されているという事実は、古代人の足跡の響きが聞えてくる想いがする。3つ目は、弥生時代から古墳時代中期にかかる道路である。この道路は、現在までに発見された遺構はないが、生駒西麓に存在する弥生時代から古墳時代にかかる集落をつなぐ道路である。南北に直線的な道路ではなく、生駒山地から派生した段丘や扇状地あるいは開折谷や谷川等の自然条件と集落の位置的な条件が重なり山寄りになったり旧大和川に近づいたりしている道路として川路と共に重要な交通路であった事が知れる。第2グリッドで検出された木道がこのような道路の付属遺構であるかもしれない。

次に、集落の範囲については、弥生時代の集落だけがある程度の拡がりを確認したにとどまり、それ以後の古墳時代や奈良時代の集落には全く知り得るものがなかった。平野遺跡の堅下変電所を中心とした集落は、第2、3グリッドでわずかな弥生式土器を出土したに過ぎず遺物包含層の状況からも集落の縁辺部という状況である。第4グリッドでは、わずかに弥生式土器を検出した。既往の調査で山寄りの地区に集落がある可能性が見い出されており平野遺跡とは別の山ノ井遺跡の弥生時代の集落遺跡が確認されよう。

古墳時代以降については、今回の調査から何ら遺構が検出されなかったが、道路敷という事で、それも一直線に伸びた計画的に造られた道路であるから、おのずから集落の位置や規模も区画化された状況にあった事が伺われる。



第 2 グリッド 下層



第 2 グリッド 最下層



第 3 グリッド



第 4 グリッド

柏原市所在遺跡発掘調査概報

1982年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話(0729)72-1501 内716

発行年月日 昭和58年3月31日

印刷 塚口印刷社

